

Typology of Person Category in Deixis (III) : Development of Types and Its Mechanism

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-02-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 吉田, 集而 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00004438

会話場面における人の概念の類型論 (Ⅲ)

——類型の発達とその機構——

吉 田 集 而*

Typology of Person Category in Deixis (III)

——Development of Types and Its Mechanism——

Shuji YOSHIDA

This is the last paper of a series in which I have set forth a new universal person deictic system and synchronic typology of person category in deixis. This final paper advances an hypothesis of the evolution of types of person category in deixis.

The hypothesis is shown diagrammatically in Figure 2, where simple types develop to complex ones. Although somewhat complicated, only two kinds of process are shown. One is the development of number, progressing from undifferentiated number to a distinction of singular and plural (pluralization), the addition of dual and then the addition of triadic ($2ND \rightarrow 4ND \rightarrow 6ND$, $2ND/3D \rightarrow (4Dns)/(5Ds) \rightarrow 5Dns \rightarrow 8Dns \rightarrow 11Dns$, and $3D \rightarrow (5Ds) \rightarrow 6Ds \rightarrow 9Ds$). The other is the interchanges of type series, from Non-Dialoguent person series to Dialoguent person series ($4ND \rightarrow 5Dns$), from Non-Singularity Dialoguent person series to Singularity Dialoguent person series ($5Dns \rightarrow 6Ds$), and *vice versa* ($6Ds \rightarrow 8Dns$).

The mechanism and prime mover of the development are discussed. Two main movers are recognized in the domain of person deictics, the lack of Loquent person (1st person exclusive) plural in the stage of primary pluralization of person deictic system, and the polysemy of Dialoguent person (1st person inclusive) in number. The latter is seen in “precursor types,” such as $4Dns$ and $5Ds$. When the $2D$ type is pluralized, the plural form of Loquent person tends to mean “speaker and hearer,” i.e., Dialoguent person appears ($4Dns$ precursor type is formed), because the real plural of the speaker does not exist in the same sense as the plural of the hearer. However,

* 国立民族学博物館第2研究部

Loquent person plural emerges with the existence of a shared common semantic component between a speaker and absent persons, and which does not also include the hearer. At that time, 5Dns type is formed if the new form of Loquent person plural has appeared. The 4ND type is formed and the Dialoquent person category is ignored if a Dialoquent person plural is also used as Loquent person plural. The other mover is the polysemy of Dialoquent person. The simplest Dialoquent person consists of speaker and hearer. When *the one set* of these person is focused, Dialoquent person is identified as singular, as seen in the Philippines; when the *two* actual persons are focused, it is identified as dual, as seen among some Australian languages; and when the *non-singular* of these person is focused, it is identified as plural, as seen among Hesperonesian languages.

These movers are not concerned with human physiology, as occurs in the evolution of Basic Color Terms [BERLIN & KAY 1969], zoological factors as in the spatial cognition in the demonstratives [YOSHIDA 1980], nor in ecological circumstances. The mechanism and movers are independent of these phenomena, since they are originally built into the cognition of the person deictic system. This means that the evolution of types of the person category in deixis can be shown as an integral part of the development of human cognition.

[Key words: cognitive anthropology, evolution, typology and deixis]

0. はじめに	3.2.4. 発達した合成形
1. 方法について	3.3. 双称型の発達
2. 類型発達の様式とその機構	3.3.1. 北アメリカの言語から
2.1. 2ND型・3D型からの発達	3.3.2. マヤ諸語の場合
2.2. 2ND型・3D型形成の推論	3.3.3. オーストロネシア語族の場合
2.3. 類型発達の機構について	3.3.4. オーストラリア系言語の場合
3. 類型発達の例	3.3.5. 9Ds型について
3.1. 非双称型の発達	4. 類型退化の様式
3.2. 非双称型から双称型へ	4.1. 非双称型の退化
3.2.1. Pidginについて	4.2. 双称型の退化
3.2.2. 双称・複数の付加	4.3. 退化の様式のまとめ
3.2.3. 自称・複数の欠如	5. おわりに

0. はじめに

第1報において、会話場面における人の概念の類型論のためのエティックな要素を検討した [吉田 1982]。そこでは、4つの人称が論理的に区別され、実際に認められることを明らかにし、数としては単数性、複数性、2数性、3数性などがエティックな単位であることを認めた。そして、第2報ではそれを基にして、シンクロニックな分析とその統合を試みた [吉田 1983]。すなわち、1129の言語(方言)から基本的類型9、派生的類型23、2数性卓越型2の類型を区別した。そして、類型と言語グループごとの対応関係を検討し、その対応関係が存在することを認めた。また、双称型と非双称型が、世界の言語においてしめる割合はほぼ半分ずつであること、さらに双称型の世界的分布から、双称の概念の発生については少なくともそれぞれ独立した3つの起源があることを提示した。これらを受けて、このシリーズの最後の報告である第3報では、それらの類型のダイアクロニックな分析とその統合をはかろうとしている。すなわち、それらの類型がどのように発達(あるいは退化)してきたかを明らかにしようとしている。

この3つの報告を通じて、私が試みようとしたことは、1) 会話場面での人の認識の仕方の変異を明らかにし、2) その変異が現在の世界でどのように分布しているのか、そして、3) そのような認識がどのようにして形成されてきたかを明らかにすることである。言葉をかえていえば、ある意味領域における認識の、世界的広がりとその発展の様式を明らかにしようとする試みである。

1. 方法について

本論においては、ある語彙素¹⁾があるとき、それに対応する意味の認識があるということ的前提にしている。しかし、語彙素のないところにはその認識がないと考えているわけではない。民俗生物学にみられる潜在的概念のように、標識化されていないが、明らかに認められる概念もある。しかし、そうした概念は標識化されることによって、操作可能な概念となり、明確な概念として定着するようになる。ここでとりあげようとする認識は、そのような定着した、明確な概念のみであり、標識化されていない概念は対象外としている。

1) 本論では原則として単一語彙素を分析の対象にしているが、膠着語のような場合は、人称、数にかかわる義務的な形態素をその対象としている。

ところで、標識化された語彙素が単一の意味を持つとは限らない。むしろ、多義的である方が一般的である。実際、ここでとりあげる人称代名詞も多義的であるが（後述する尊敬や謙譲の項を参照）、その多義性の幅は極めて狭い。それは、代名詞のもつひとつの性質であるかもしれない。すなわち、代名詞は多くのものごとを指し示す機能を持ち、それ故に代名詞自体のもつ意味があまりにも多義的に傾くと、その機能がそこなわれやすくなるのであろう。多くの語彙素では多義性を十分に考慮しなければならないのに対して、代名詞の場合は、例外的な多義性を除けばほぼ一義的と解釈してよいと考えられる。

さて、本報では類型の発達の様式をこの語彙素の形態から分析しようとしている。その際、あるひとつの言語の人称代名詞の体系の中で、各語彙素がどのように異なるのか（特に双称および単・複の間での異なりにおいて）を形態的に3つに分類しておくことは便利である。すなわち、形態的変異、合成的変異、語彙的変異の3つである。形態的変異というのは、主として接辞によって規則的に変異しているものをいう。合成的変異は、語彙素同士が組み合わせられ、合成された語彙がみられる変異をいい、語彙的変異は、これら以外の互いに異なった語彙素からなっている変異をいう。

形態的変異においては、接辞されて派生した語彙素が一般に新しいと考えられる。また合成的変異においては、合成されて派生した語彙素が同様に新しいと考えられる。勿論、例外もありえる。特に、語彙素の形態の変化の激しい場合は、この一般法則からはずれることもある。しかし、そのような例外はおくとして、この2つの変異については上記の一般法則を適応しようとしている。語彙的変異については、このような簡素な一般法則はない。なんらかの他の資料がない限り、語彙素間の新旧を問うことはできない。

本報で用いる資料には2種類ある。ひとつは祖形が復元されている言語資料であり、今ひとつは、それを欠いている資料である。前者では、先の3つの変異について検討可能であるが、後者については語彙的変異については分析不可能である。それ故、それらについては、語彙的変異は本報の検討外におかれている。

ところで、復元された祖形というものは、現在みられる語彙から、それぞれ独立に復元されたもので、時間的な深さはほとんど考慮されていない。そのため、復元された祖形を組み合わせるとひとつの体系ができるが、それがそのままの形がかつて成立していたという保証はどこにもない。むしろ、異なった時期に発生してきたものと考えた方がよい。また、祖形のもつ意味も、現在から考えられるものとは異なった意味であることも十分に予想されることであり、この点にも注意する必要がある。

祖形をこのようにみるとき、祖形の取り扱い方はそれぞれの言語グループごとに個別に扱われなければならない。例えば、オーストロネシア語族では、復元された祖形は語彙の変異によって構成され、それ以上にさかのぼることはできず、また実際の資料と照合するとき、祖形で構成された体系を出発点としてよいと考えられる。また、チベット・ビルマ語族では、単・複が別々に復元されているため、単数（この場合は単・複未分化と考えている）から出発することができる。マヤ諸語では、注意深く現在の人称代名詞の体系を検討すると、現在の自称・複数は双称から派生していることが読みとれる。このように、復元された祖形をもつ資料では、それぞれ個別にもっとも論理的整合性を保つように取り扱われている。

最後に表記法について述べておこう。類型の命名法は次のようである。D: 双称型 (Dialoguent), ND: 非双称型 (Non-Dialoguent)。双称型をさらに2つに分け、Dns: 双称非単数性型 (Non-Singularity Dialoguent), Ds: 双称単数性型 (Singularity Dialoguent) の区別を行なっている。また、それぞれの類型に数字をつけて細分化しているが、その数字は他称を除いた語彙素数を示している。たとえば、4ND型は自称、対称に単・複の語彙素をもつことを示し、5Dns型では、それに双称・複数が加わっていることを示している。詳しくは前報 [吉田 1983: 320] を参照していただきたい。

なお、図の表記法は前報に述べた通りである [吉田 1983: 312-316] が、本報の理解の手助けのために図の表記法の例を図1に示しておく。人称については上から双称、自称、対称、他称と並べられている。

ただし、第1報で述べたように他称は本論の検討から除外されている。図において、時に他称が表記されているのは例外で、他称を記入した方がわかりやすいと判断したときのみである。また、双称をもたないときは一番上の双称が表記されていない。横には、単数性、複数性、2数性、3数性の順に並べられている。そして、この人称と数で形成されるマトリックスの内、ある言語がもつ語彙素でうめられる部分のみが表記されている。なお数については、単数性や複数性、2数性などを第1報では採用し

	sg	pl	dl	tr
D				
L				
A				
Ab				

- D : Dialoguent person (双称)
- L : Loquent person (自称)
- A : Audient person (対称)
- Ab : Absent person (他称)

図1 図の表記法

たが、煩雑であるため、単に単数や複数と記しているが、それは単数性や複数性の省略と考えていただきたい。

類型の発達の過程の表記法においては「遷移形」という形が挿入してある。それは、実際には存在しないが、変化の過程をより明確にするために有効であると考えたからである。以下の図で [] に囲まれているものがそれである。

2. 類型発達の様式とその機構

2.1. 2ND型・3D型からの発達

前報で基本的類型として9つの類型を取り上げた。そして、「追記」のところで記しておいたように3D型(図1および2参照)が存在するため、合計10の類型を基本的類型として認めたことになる。これらの基本的類型は、全サンプルの93.8%を占めるため、基本的類型の発達の様式を示せば、その全体像をほぼ示せたことになるであろう。なお、派生的類型をも加えた図は、図43に示しておいた。この図を基本的類型のみで示したのが図2である。図2中にみられる [] のついた2つの型は、先に述べた「遷移形」に含まれるものであるが、特にその重要性を認めて、基本的類型に準じた取り扱いをしている。ひとつは2ND型が複数化してできる、自称・複数を欠いた類型である。これを4Dns型と名付けておこう。もうひとつは3D型が複数化してできる、自称・複数を欠いた「遷移型」である。これを同様に5Ds型と名付けておく。

さて、自称・対称の単・複の区別のない2ND型から、単・複が区別される4ND型への変化は容易にあとづけることができる。日本語やユマ(Yuma)語、ビルマ語、ブルジ(Burji)語、カンバタ(Kambata)語などのさまざまな言語で自称・対称が形態的複数をもつことから推定できる(本文p.75参照、以下同様)。また、トゥニカ(Tunica)語やトンカワ(Tonkawa)語にみられるように、接辞をとって2ND型から4ND型を経て、2数をもつ6ND型に変化したと考えられる例もみられる(p.76)。8ND型は島部キワイ(Island Kiwaiian)語のみしか知られていないが、この場合も接辞をとって、2ND→4ND→6ND→8NDと変化したと推論される(p.76-77)。

次に非双称型から双称型への変化に眼を転じてみると、まず2ND型から4Dns型への変化が眼につく。この変化は実は重要な問題をはらんでいる。すなわち、自称・対称の単・複の分化、あるいは複数の形成に際して、自称の複数が形成されないことが認められる。すでに多くの人が指摘しているように、話し手の複数というのは、会

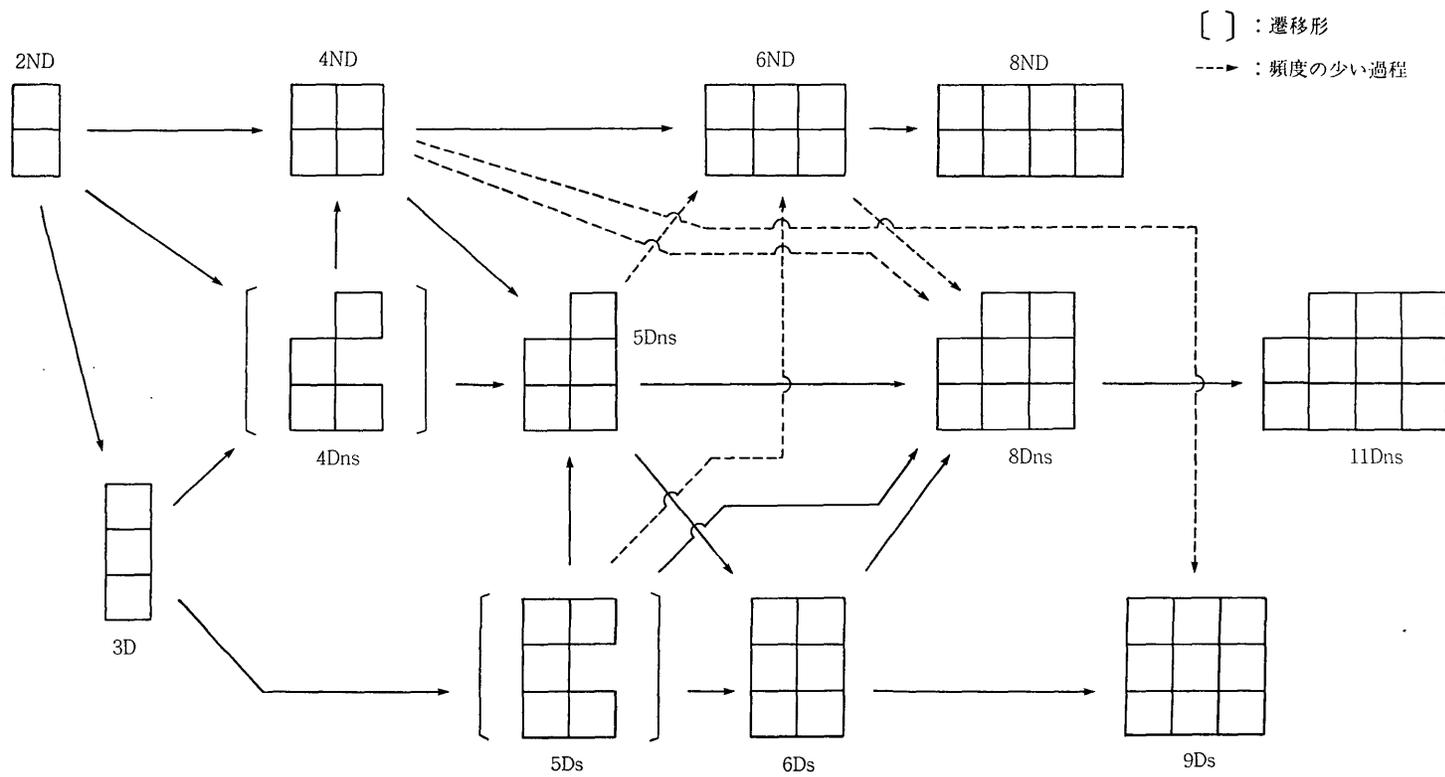


図2 基本的類型における発達の様式

話場面においてはよほど特殊な場合（たとえば、声をあわせて何かを話すような場合）しか存在しない。それ故、話し手は基本的にはひとりでしかない。しかし、聞き手が複数であることは十分にありえることである。この点が会話場面における話し手と聞き手の大きな違いである。そして、自称・対称の複数が形成されるとき、自称の複数形は話し手の複数の意味せず、話し手と聞き手という意味をもつようになる。すなわち、双称を意味するようになる。このような例は、チベット・ビルマ語族 (p. 84-87) やオトミ (Ötomi) 語 (p. 89), シュワップ (Shuswap) 語 (p. 89) にみられる。

この 4Dns 型は「遷移型」であり、このままの形では定着しない。双称が自称・複数にも用いられるようになると 4ND 型になる。チベット・ビルマ語族のデンジョン (De'-jong Ke') 語やラフル (Lahul) 語はそうした例と考えられる (p. 86-87)。一方、後にある意味成分において話し手と共通する人々の存在に気付かれ、新たに自称・複数形が形成されると 5Dns 型となる。先のチベット・ビルマ語族の例でいえば、プリック (Purik) 語やバルティ (Balti) 語がその例としてあげられる (p. 86)。

4ND 型から 5Dns 型への変化は、双称・複数の付加という形で進行する。例えば、オジブワ (Ojibwa) 語の双称・複数は、自称と対称との合成によって形成されている。このような例は、オルドス・モンゴル (Ordos Mongol) 語やトゥングース (Tungus) 語、ドラヴィダ語族 (p. 79-80) などにもみられる。一般に、4ND 型から 5Dns 型への変化は、他の双称をもつ言語グループとの接触によって発生したものと考えられ、ドラヴィダ語族の例はその典型的なものである。

4ND 型から 8Dns 型や 9Ds 型への変化は、アフリカにみられる例外的なもので、自称、対称、他称の単・複がさまざまに組み合わせられて形成されたものの例である。ただし、4ND 型から 8Dns 型への変化はンコシ (Nkosi) 語にみられ、4ND 型から 9Ds 型へはンゲンバ (Ngemba) 語にみられるだけである (p. 90-91)。

6ND 型から双称型への変化としては、図中にはないが、双称・複数だけが付加する類型がある。これは、特にニューギニアにみられる類型で、“all” や “with” にあたる接辞が自称・複数につけられて形成される (p. 81-82)。ただし、双称・2 数は形成されず 8Dns 型とはならない。

6ND 型から 8Dns 型へと変化したと考えられる例は、オーストラリアのカルカトゥング (Kalkatungu) 語の例があるだけ (p. 108) であり、まれな例と考えられる。

2ND 型から 3D 型へ変化したと推定される例は、アメリカのラコタ (Lakota) 語やウィンネバゴ (Winnebago) 語にみられる (p. 91-92)。

この 3D 型からは、2 つの変化があったと考えられる。ひとつは、3D 型が複数化

するとき、双称は複数とみなされ、双称の複数形が形成されない場合である。今ひとつは、双称にも複数形が形成される場合である。そして、これらの場合、基本的には自称の複数形が形成されなかったと考えられる。ウィンネバゴ語の場合、双称、自称、対称はともに複数の接辞をとって複数形が形成され、3D型から直接的に6Ds型に変化したようにみえるが、ラコタ語などの近縁の言語の場合と考え合わせると、一旦は5Ds型が形成された後に6Ds型となったと考えた方が理解しやすい。これは、先に2D→4Dns→4NDの例としてあげたデンジョン語やラフル語と同様の論理である。

さて、3D型が複数化するとき、双称に複数が出現しない場合は4Dns型となる。この例は高地マヤ諸語にみられる (p. 97)。そして、この例では双称・複数が自称・複数にも用いられるようになり、4ND型へと変化する。ただしマム (Mam) 語では、自称・複数に双称・複数から派生し、5Dns型となる (p. 98)。

5Dns型から8Dns型への変化はあちこちに散在する。たとえば、チベット・ビルマ語族のパヒン (Bahin) 語 (p. 85)、マヤ諸語のツェルタル (Tzeltal) 語 (p. 97)、オーストラリアの言語、特にダリ語族 (p. 105-106) の言語に多くみられる。しかし、もっとも典型的な例はオーストロネシア語族の例であろう。特にメラネシア語群の言語では5Dns型から8Dns型に変化したと考えられ、ポリネシア語群は5Dns→8Dns→11Dnsと変化したと考えられる (p. 100-102)。

フィリピンに多くみられる6Ds型は5Dns型から変化したとみてよい。そのほとんどの例は、双称・複数が合形成であることから推測される。ただし、どのように合形成されたかにはさまざまな変異があるが、類型の変化として5Dns型から6Ds型に変化したと考えてよい (p. 102-104)。

5Dns型から6ND型へ変化する例が1例だけ知られている。この場合は、双称の2数性に焦点が合わされ、自称・双称の2数形とみなされるようになり、対称にも2数形が出現する例である。オーストラリアのグヌ (Gunu) 語 (p. 108) がその例である。対称に2数形が出現していない変化なら北米のカリエル (Carrier) 語 (p. 94) やオーストラリアのヤディン (Yadin) 語 (p. 108) にもみられる。

3D型の複数化において、双称にも複数形が形成されると5Ds型となる。この過程は北米の言語とオーストラリアの言語に典型的にみられる。北米の言語では、ウィンネバゴ語のように6Ds型に変化するとともに、イロコイ (Iroquoian) 語のように6Ds型からさらに8Dns型まで変化したと考えられるものもある (p. 93-94)。また、マヤ諸語では、ラカンドン (Lacando'n) 語は6Ds型に、ユカテコ (Yucateco) 語は

5Dns 型になったと考えられる (p. 95-96)。

5Ds 型から 6ND 型への変化はオーストラリアのピチャンチャチャラ (Pitjantjatjara) 語 (p. 109-110) にみられる。双称・複数が自称・複数に用いられるとともに、双称・単数は自称・2数にも用いられるようになる。その後、対称・2数が形成されて 6ND 型となる過程を経ると考えられる。

また、5Ds 型からさまざまな過程を経て (6Ds 型を経由するものを含めて)、8Dns 型に変化する例がオーストラリアの言語にみられる。ンガミニ (Nagmini) 語やヤルルヤンディ (Yarluyandi) 語、ディヤリ (Diyari) 語、ヤワラワルガ (Yawarawarga) 語、ヤンドゥルワンダハ (Yandruwandha) 語、ガラワ (Garawa) 語、アニユラ (Anyula) 語、ムルンギン (Murngin) 語などはその例と推定される (p. 110-112)。

最後に 6Ds 型から 9Ds 型に変化したと考えられる例をあげておこう。それはリーフ (Reefs) 語であるが、この近縁のサンタ・クルスの言語はいずれも 6Ds 型である。リーフ語のみがさらに2数の接辞をとり 9Ds 型となっている (p. 114)。

このように、類型発展の様式をみてくると、図上に入れられた矢印が同等の重みをもつものでないことは明瞭である。より基本的な発展の様式は、それぞれの系列 (非双称型、双称非単数性型、双称単数性型) ごとに数がより細かく分化することが主道であり、系列間の変化では、4Dns 型から 4ND 型 (双称の概念の消失)、4ND 型から 5Dns 型 (双称の概念の付加)、5Dns 型から 6Ds 型 (双称・単数性に収斂)、5Ds 型から 5Dns 型 (双称・単数性の消失)、5Ds 型から 8Dns 型 (双称・単数性が双称・2数性に転移) といった経路が重要であろう。このような系列間の変化を含めたものが、類型発展の主たる様式と考えられる。

2.2. 2ND 型・3D 型形成の推論

2ND 型および 3D 型からの発展についてこれまで述べてきたが、2ND 型や 3D 型はどのように形成されたのであろうか。

現在ある言語の中で自称・対称をもたない言語はない。そのため、自称や対称の概念の発生を論じる具体的な例はない。ただし、他称は自称や対称が発生した後にあらわれたであろうことはかなりの程度、推測できる。例えば、第1報で述べたごとく、他称は指示代名詞で占められているものが数多くある。また他称にはマーカーのないものがあちこちにみられるし、対称と他称に同じ人称代名詞が用いられている例も時にみられる (例えば、オミエ (Ömie) 語 [AUSTING & UPIA 1975])。それ故、他称は自称や対称より後にあらわれたことはかなりの程度、予測はつくが、自称や双称、

対称の発生を考えることはかなりむずかしい。とはいえ、全く手がかりがないわけではないので、推論は承知の上で少し検討してみよう。

サルト/ユイ (Salt-Yui) 語は特殊な例ではあるが (p. 82-83), 自称に単数が生まれている。対称にはそれに対応するものはない。すなわち、自称の方が対称より早く出現しているということを示している。また、対称は自称から派生したと思われる例もある。例えば、モンゴル語の optative では自称は -ki であり、対称は -kini であり [FORCHHEIMER 1951: 5], 対称は自称から生まれたものとみることができる。

日本語の場合、「あ」、「わ」、「な」が基本的な人称代名詞であった。いずれも『古事記』にその用例がすでにみられる。この内、「あ」は自称に限られていたが、「わ」は「あ」とは少し異なるようだ。すなわち、「わ」は「あ」と同様に基本的には自称であると考えられるが、反射代名詞として「その人自身・自分自身」という意味をもち、後には親称・卑称として対称にも用いられるようになる。「な」はもともと「自分自身」という意味であり、自称にも対称にも用いられていたが、奈良時代以後、「な」はむしろ対称として定着する。このようにみえてくると、日本語では対称よりは自称の方が早く特定化されると考えてよいであろう。

一方で、この日本語の例はさらに想像をたくましくさせる。すなわち、「自分」という語は話し手も聞き手も指し示せる言葉である。これがわずかに変化すれば自称にも対称にもなる。たとえば、「ご」という丁寧な接頭辞をつけると「ご自分」となり、決して自称とはなりえず対称化する。「たく」と「おたく」、「うち」と「おうち」の例でもよい。自称・対称の分化にはこのようなものがあるかもしれないことを想像させる。

さらに、「自分」が話し手自身や聞き手を指すことはできても、その会話に参加していない人を指すことはできない。「自分」の発生は、会話場面にいる人々とそれに参加していない人々とを区別する語でもある。

私は会話場面における「指示の語」としての発達は、まず、「会話に参加している」と「会話に参加していない」という対立が基本であると思う。参加していない人や物は指示代名詞の世界に入る。次に、その中から人だけが取り出され、先の「会話に参加している」人と再編成される例がでてきた (他称の再編成)。インド・ヨーロッパ語族などがその典型であるが、これらは決して一般的なものでない。

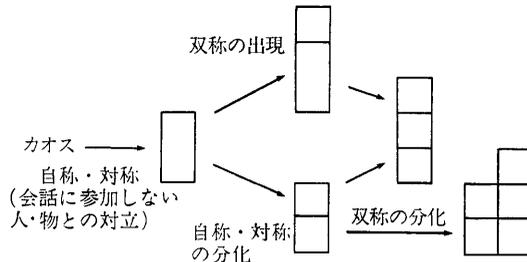
「会話に参加している」という枠の中で、まず自称が分化し、ついで対称ができた。あるいはほぼ同時にできたと考えてもよい。ところが、双称はどの段階で出現するのであろうか。対称より早いのか遅いのか。あるいは同時なのか。

「自分」という自称・対称の両方を指す語が初めに出現したというのは、いろいろある可能性のひとつにすぎないであろう。しかし、さらにこの議論をつづければ、自称・対称の分化を起す前に「複数」が出現すると、会話場面での複数というのは双称でしかない。「自分」と「自分ら」は「自称・対称」の組と「双称」の対立ということになる。この場合は、対称の分化よりもむしろ、双称の分化の方が早いということになる。

「自分」と「ご自分」にあたる分化の後に複数化が起れば、それは双称が自称・対称の分化の後ということになる。この場合は、複数化と考えなくてもよい。自称と対称の合成ということも起り得る。

私はこの2つの可能性はともにあると思う。勿論、「自分」、「ご自分」、「自分ら」というのは単なる例にすぎない。そこにはさまざまな変異があるであろう。そして、先にあげた過程がどの例をも包括するものとは思っていないが、むしろ、少なくともこのような過程があったのではないかという推論である。

これを図化すると次のようになるであろう。



指示代名詞が「近称」、「遠称」などの距離的な分化を起すことと平行して人称代名詞の分化が起った可能性もある。「近称」と自称、「遠称」と対称の組の平行関係も想像させる。しかし、今はひとつの可能性を示すだけで筆をとめることにしよう。

2.3. 類型発達の機構について

ところで、発達の様式を提示しただけでは不十分である。どうして、このような様式が起るのか、その動因、あるいはメカニズムをも明確にしなければならないであろう。実のところ、それらについては今までに述べた中にすでにふれられている。しかし、それをもう一度ここで整理しておこう。

発達の動因として重要な点は2つある。ひとつは複数化、あるいは2数化、3数化などの数に関するもの、今ひとつは双称の発生とその数の多義性に関するものである。

本報で考察したような代名詞の複数化については、名詞の複数化と対応させて考えなければならない点が多くある。しかし、それは本報の範囲を越えている。ただ、ここでは数が未分化の状態から分化するという方向があることのみを認めておくことにしよう。そして、各言語において数が分化するとき——そのほとんどは単数と複数の分化と考えてよいが、人称代名詞にどのような分化があらわれてきたかを考察してみよう。

非双称型では、2数の見られるものが少なからずある。ある種の名詞には2つで1組というものがいくらかみられる。たとえば、両腕、両手、両眼、双子、左右1組のものなどいくらかでもある。そうしたものが2数の基礎となり、それが代名詞の世界にもちこまれた可能性は高い。一方で、代名詞そのものの中にも2数化を促す要因の認められるものがある。すなわち、複数が形成されるとき、初めに2数、あるいは2数性複数として出現したものがある。もし、2数性複数の複数に焦点が合わされると、2数性という性質を失い複数として定着するだけであるが、2数性に焦点が合わされると2数が独立し、2数と複数が分化するようになる。

このように、名詞の2数や代名詞の2数性複数から2数が生まれる土壌はあるが、3数の派生する可能性はこの中にはない。ただ1例、3数のある非双称型がみられるにとどまるのはこのような理由によるのであろう。島部キワイ語のみが3数をもつが、それはオーストロネシア語族の言語との接触による、外からのインパクトで形成されたのではないかと推測される。キワイ語の中でも、内陸部の方言ではこのような分化は起っておらず、外部との接触の可能性の高い島部キワイ語だけに3数をもつ非双称型がみられるからであり、自己の内的発展とは考えにくい。

双称型においても、非双称型にみられた2数の分化は十分に考えられるものである。しかし、双称型には双称型独自のメカニズムがみられる。まずひとつは、自称・複数形成されず、かわりに双称・複数出現するメカニズムである。Boasをはじめ、すでに何人かの人々が指摘しているように、純粹に話し手の複数というのはいりえないことである。話し手は、声を揃えて何かを言う場合を除いて独りきりである。それに対して、聞き手の複数というのは、いくらかでも可能である。それ故、会話場面において、聞き手の複数に対応する話し手の複数はなく、聞き手の複数とは異なった話し手の複数形成される。すなわち、話し手と聞き手という複数である。しかし、それを話し手中心に見ると、話し手にとっての非単数であり、それ故に話し手の単数に対しての複数形という形になる(こうしたことが実際に起ったであろうことを推測させる例は北米の言語にみられる)。やがて、会話場面に存在していない人をも含めて指す——すなわち、より抽象度が増大したレベルで人を指し示すように発展してくると、

ある意味成分で共通する聞き手の存在に気付かれるばかりでなく、話し手にもそのような人の存在があることに気付かれるようになる。そのとき、話し手の複数（自称の複数）の取り扱い方には3種類ある。最も典型的なものは、双称・複数に対立した別の形の複数が用いられる場合である。細かにいえば、双称・複数を少し変形させたもの（チベット・ビルマ語族のように指示詞的要素が組み合わせられる場合も含めて）、古い複数形を復活させること、あるいは隣接の言語から借用するなど、さまざまな変異がみられるが、基本的なメカニズムは同じである。2番目は、双称・複数が自称・複数を兼ねる場合である。双称・自称の区別は文脈に頼るようになる場合といってもよい。しかし、一旦、このような過程が進行すると、もはや双称の存在には注意が払われなくなってしまう。3番目はまれにしか起らない、あるいは過渡的なものとしてあらわれるもので、自称・単数が自称・複数を兼ねる場合である。同じく、それらの区別も文脈で十分に区別できるであろう。しかし、多くの場合、他の人称と同様に複数化が進行して、初めのケースのように何らかの自称・複数がその穴を埋めるようになると考えられる。

以上は双称が発生するメカニズムのひとつであるが、自称・対称の単・複が形成（双称・複数が自称・複数になった場合も含めて）された後、双称・複数が付け加わる場合がある。典型的な例は自称と対称との組み合わせによって形成された合成形である。しかし、一般に自称・対称の単・複しか認められない類型から独自の発展として双称が出現することはほとんどないであろう。この場合は他の言語のインパクトを想定しなければならない。

双称の別の発生は、複数化が起る前に双称が形成される場合である。第1報で述べたように、論理的には双称という人称が存在して当然である。このような例は、単・複の区別をあまり重要視していない言語で確かめることができる。また、演繹的に復元することもできる。

ところで、双称型の発展の鍵は双称の数における多義性にある。双称の最小の単位は話し手と聞き手の2人である。それは2人を1組とみれば単数扱いとなる。また、実際の2人に注目すれば2数ということになるし、1人ではないという点に重点を置けば複数ということになる。この双称の数における多義性が双称型の類型を変異の大きいものにしていく最も基本的なメカニズムである。

例えば、5Dns 型からの変化をみてみよう。双称が単数として取り扱われると 6Ds 型が派生してくる。フィリピンにみられる 6Ds 型はこの過程を経たと考えられる。5Dns 型において2数に焦点が合わされると 6ND 型が派生してくる。オーストラリ

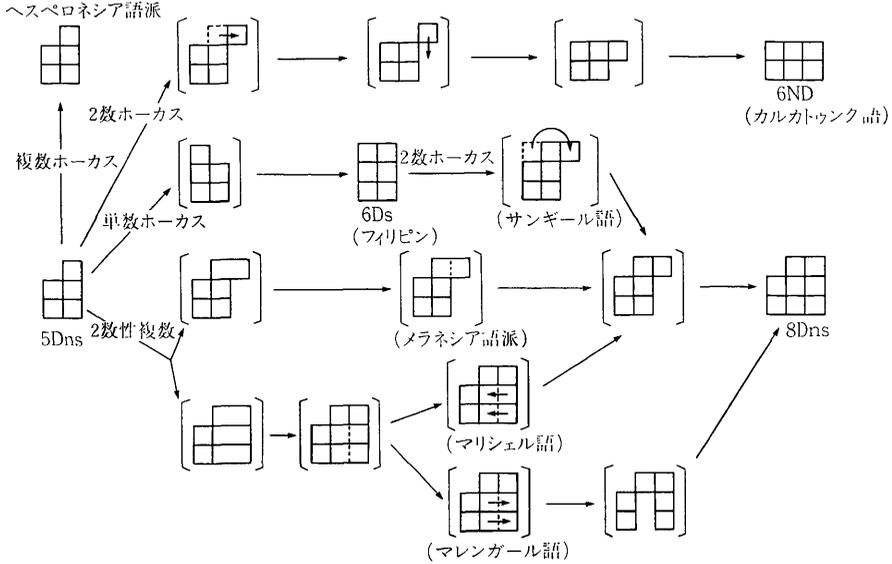


図3 5Dns型からの他のタイプの派生

アのカルカトゥング語はその例である。また、6Ds型において、単数とされていたものが2数として認識されなると8Dns型が派生してくる。フィリピンのサランガニ・サンギール(Sarangani Sangil)語はこの過程を経た。5Dns型で、双称が複数とみなされると何の変化も起らない。ヘスペロネシア語派のほとんどはこの例と考えてよい。ところが、双称の複数に複数でも2数性複数であるときは変化する。このときは双称において2数形が新たに派生してくる。この過程は、実はフィリピンの6Ds型の複数の派生とかなりよく似たものである。ともに双称が2人だけを指す場合と、2人以上を指す場合の区別が進行する。**kita* という双称は恐らく両義的に使われていたのであろう。ところが、フィリピンでは**kita* は2人だけを指すことに限定され、一方メラネシアでは2人だけであることを強調する形、**ki(n)tadua* という「2」をつけた形が発生してきた。一旦、この形ができると、*-*dua(2)* をつけるということが自称・対称にも波及してきた。そして8Dns型が形成される。この*-*dua* という数をつけることは、やがて3、4へと広げられていったのであろう。ポリネシアやメラネシアにみられる11Dns型はこの延長上にある。

しかし、この場の2数性複数には非双称型の2数性複数と異なることに注意しなければならない。それは、双称に実際に2人を指すという要素があるために2数性複数が形成されたのである。その必然性が非双称型よりも極めて強いという点である。

8Dns型の形成をみていると、見かけ上少し異なった過程があるのに気付く。2数

性複数が双称だけに限らず、自称や対称にもその性質を持つ場合である。それはオーストラリアの言語にみられる例であるが、これらはむしろ非双称型の2数の派生と同じ過程に近いものである。ただし、全ての人称が2数性複数という性質をもつようになった、あるいはもつように促進させたのは双称の存在であったことを忘れてはならない。

このように、自称・複数の欠如と双称の数の多義性が類型の多様さを造り出す最も基本的な動因であった。このことは、会話場面における人の認識が多くの場合、外からのインパクトによって起ったのではなく、システム内に変化させる主動因があったことを示している。そのことは、生態学的環境や社会の発達あるいは複雑化といった外的な条件とは何も相関していないという状況をうまく説明させる。それは一粒の種、会話場面における人の認識という場に、播かれるべくして播かれた双称という認識の種の独自の発達がこのような類型の多様さを造り上げたのであった。そして、このことが先に述べた外的条件と相関しないばかりでなく、人間の中に埋め込まれた動物学レベルや人間の生理学レベルに根をもつ認識とは切れた、いまだかつて提示されたことのない人間の純粋な認識の発達の例として提示できる理由なのでもある。

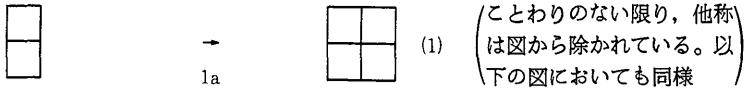
3. 類型発達の例

類型の発達の例を述べるにあたって、非双称型と双称型に分けるのが適当であろう。しかし、その両方にかかるものも少なからずある。そのため、その中間的な項目をひとつ増やした。一応、この原則に従うが、ある程度言語グループごとに取り扱うため、この中にうまくおさまらない場合もある。それ故、その取り扱った例の中心的な部分がどの項目に含まれるかによって振り分けられている。従って、それぞれの項目からはみ出すものも出現する。さらに、この後に退化の様式を記述する予定であるが、その一部がすでにこの中にとりこまれているのも同じ理由による。

3.1. 非双称型の発達

非双称型の発達の例として、まず日本語をみてみよう。日本語の人称代名詞はかなりこみいっているが、単純化すると次のようになる。自称としては「あ」、「あれ」、「わ」、「われ」などが上代に用いられていた。対称としては「な」、「なれ」が上代に、中古には「なんじ」があらわれる。以後、さまざまの変遷を繰り返すが、自称の複数形としては「われわれ」、「われら」がみられ、対称には「なんだち」、「なんじら」が

みられる。これらはいずれも「われ」、「なんじ」などの後に発達したものである。人
称代名詞は次々と変ってゆくが、いずれの例においても複数形は、あらわれはじめた
人称代名詞が何らかの複数の接尾辞をとるものがほとんどである。それ故、日本語の
場合は次のように記してよいであろう。



一般に単・複の区別が重要でない言語では日本語のような形態の複数がよくみられ
る。

このような例はアメリカのユマ (Yuma) 語 [FORCHHEIMER 1951: 22] にもみら
れる (図4)。少し変化しているが明らかに複数の接尾辞 -c の付加した形である。ま
た、チベット・ビルマ語族にも同様の例がみられる。例えばビルマ語では自称・単数
は na, 対称・単数は koh であるが、それらに -do が接辞し、前者は nado, 後者は
kohdo>kohro となる [FORCHHEIMER 1951: 19]。

アフリカのクシ語派に含まれるブルジ (Burji) 語やカンバタ (Kambata) 語は図4
のようであり、複数形は規則的に接尾辞をとる [HUDSON 1976: 256]。これも(1)の
図式と考えてよい。

ニューギニアのマネム (Manem) 語でも複数には規則的に kij が付加している
[VOORHOEVE 1971: 64]。これも同じ変化とみてよい。

基本的な様式は同じであるが、少し異なった例がある。それはオスマン・トルコ

	sg pl	sg pl	sg pl
L	ʔanʔáʔc	ʔanʔécəc	na nado
A	mánʔc	macəc	koh kohro
			Ab
			ani naanu
			aši ašinu
			iši isinu
			išee isinu
			m f
	ユマ (Yuma) 語	ビルマ (Burmese) 語	ブルジ (Burji) 語
	sg pl	sg pl	sg pl
L	ani	naʔooti	ben
A	ati	aʔnaʔooti	biz
Ab	ise	issʔooti	sen
	issa		siz
		aŋk	o(n)
	m f	kij ta kij sa kij aŋk	onlar
	カンバタ (Kambata) 語	マネム (Manem) 語	オスマン・トルコ (Osmali-Turkish) 語

図4 2ND型から4ND型の例

の複数形に **-to**, **-ibi** がそれぞれ接辞したものである [WURM 1975: 227]。-to は 2, **-ibi** は 3 を意味する接辞であると考えられ、後に付加したのであろう。島部キワイ語の場合は次のようである。

	sg	pl	dl	tr
L	mo	nimo	nimoto	nimoibi
A	ro	nigo	nigoto	nigoibi

図6 島部キワイ (Island Kiwaian) 語



	sg	pl	dl	
L	'anā	naḥnu	antū	
A	'anta	'antum	'antumā	m
	-----			f
	'anti	'antunna		
Ab	huwa	hum	humā	m
	-----			f
	hiya	hunna		

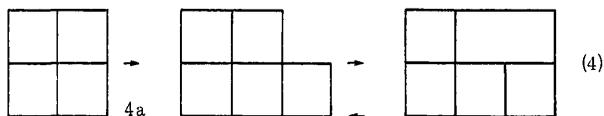
アラビア (Arabic) 語

	sg	pl	dl	
	yinu	inu	intu	
	yetu	iti	it	
	itì	iṣi	intu	m
	iṣi			f

ディジ (Dezi) 語

図7 対称・2数の付加

アラビア語では、対称、他称には2数形がみられるが自称にはみられない [HAYWOOD & NAHMAD 1965: 44]。そして、名詞にも2数形が存在する。恐らく、2数形が加わったとき、自称だけは形成されなかったのではないであろうか。自己とその他の分別が明確であり、自己以外には2数形を認めても、自己の2数は認めなかったであろう。アラビア語の場合は次のような図式となる。



アフロ・アジア語族のディジ (Dizi) 語では対称にのみ2数形がみられる [ALLAN 1976: 383]。どのような理由で、この2数形が生まれたのかは明らかでない。ディジ語の属す他のオモト語派は4Dns型で、理由は不明であるが、4Dns型に対称・2数が加わったと考えられる。他称を考慮外とすれば、その図式はアラビア語と同じになる。

3.2. 非双称型から双称型へ

3.2.1. Pidgin について

Pidgin というのは勿論、新しく造られた言語であるが、それはなかなか興味深い例として取り上げることができる。

ニューギニアの Pidgin English [LAYCOCK 1974; WURM 1971] の人称代名詞の体系は高地でも海岸地帯でも基本的には同じであるが³⁾、海岸地帯では双称は必ず使われるのに対して、高地では双称を使わない人が多いという現象がみられる。それ

	sg	pl	dl	tr
D		yumi	yumi-tupela	yumi-tripela
L	mi	mipela	mi-tupela	mi-tripela
A	yu	yupela	yu-tupela	yu-tripela

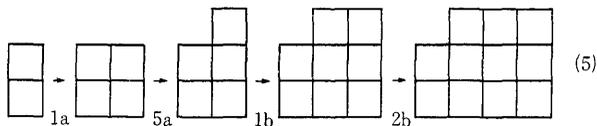
ニューギニアのPidgin

	sg	pl	dl
	yunmi	yunmalabad	
	mi	melabad	mindubala
	yu	yulabad	yundubala

オーストラリアのPidgin (Roper River)

図8 Pidgin English

は、それぞれの地域の言語の反映とみてよいであろう。それはさておき、その人称代名詞は図8のようである。それぞれが英語のどの語を基盤としているかは明らかであるが、興味あるのは yumi が合成語であり、しかも双称の複数であることである。この複数化の過程は次のようである。



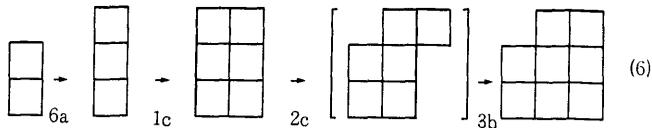
(非双称型から変化する場合は a, 双称非単数性型から変化する場合は b, 双称単数性型から変化する場合は c を付加している。数字は述べていく順に従ってつけられている。また、() 内の数字は図式の番号を示している。)

まず、-pela を付加して複数化が起る。それと平行して双称が yu と mi を合成して造られる。そして基本形が形成された後に、-tupela, -tripela が付加されていった。義務的ではないけれども、海岸地帯ではさらに -popela, -paippela のように続けることができる。

ただし、Pidginが全てこの過程で形成されたというわけではない。オーストラリア

3) 前報で New Guinea Pidgin (Coastal & Lowland) を 5Dns 型としたが、11Dns 型に訂正する。

の Roper River で用いられている Pidgin [SHARPE 1975] はニューギニアの場合と少し異なっている。ここでは *yunmi* は単数扱いになっているが、双称に2数形を欠いているため、実質的には2数とみてよいであろう。この場合は先の過程と少し異なり、次のような過程と考えられる。



複数化を起す前にまず双称が造られ、後に複数化が起った。そして、さらに自称・対称に2数形が出現したという順序である。

3.2.2. 双称・複数の付加

さて、ニューギニアの Pidgin のように双称・複数が合成形である言語をいくつかみつけ出すことができる。例えばアルゴンキアン語族のオジブワ (Ojibwa) 語 [FORCHHEIMER 1951: 77-74] はそうしたもののひとつである。対称、他称の複数

	sg	pl	sg	pl	sg	pl	sg	pl	sg	pl
D		kinawind		ki- -inan		č'i-bida t'a-bida		miti		a'n-cig na'cig
L	nin	ninawind	nin- -nin- -inan		bi	bida	bi	bü	ag	cig
A	ki(n)	kinawa	ki- -ki- -iwa		č'i	t'a	ši	šu	na'(na'g)	na'simaḡ na'soḡ
Ab	win	winawa	o-	o- -iwa						
	独立人称代名詞 オジブワ(Ojibwa)語		所有代名詞		オルドス・モンゴル (Ordos Mongol)語		トゥングース (Tungus)語		ガロ(Garo)語	

図9 4ND型から5Dns型(1)

形には *-awa*、自称には *-awind* が付加している。双称は、対称の単数形 *kin* に自称の複数の接尾辞 *-awind* が組み合わせられている。この形式は所有格でも同様である。双称は自称と対称との合成形とみてよいであろう。そして、実はオジブワ語だけでなくアルゴンキアン語族の多くはこのオジブワ語と同様の形式で双称を形成している。

またアルタイ語族にも同様の例がみられる。オルドス・モンゴル (Ordos Mongol) 語 [FORCHHEIMER 1951: 73] では、双称は対称の単数あるいは複数と自称の複数との合成語である。一方、トゥングース (Tungus) 語 [FORCHHEIMER 1951: 72] では、自称、対称は規則的に *i*→*u* に変化している。そして、双称は *miti* であるが、

ti は対称の古形 (ci<*ti), mi は自称の古形であり, 自称と対称から合成されたものであるという [FORCHHEIMER 1951: 72]。

チベット・ビルマ語族にもこのような例がみられる。ガロ (Garo) 語の対称の複数には so という要素がみられ, 2数のマーカーと思われ興味深い, それはさておき, 双称は na'ciŋ<na'+ciŋ, a'n-ciŋ<aŋ+ciŋ と考えられる。前者は, thou+we, 後者は I+we という形である [FORCHHEIMER 1951: 81]。そうであるならば, 双称は自称と対称との合成形である。

ドラヴィダ語族はもともとは双称をもっていなかったと考えられる。恐らくムンダ語群との接触によって双称をもつようになったのであろう。テルグ (Telugu) 語 [FORCHHEIMER 1951: 70-71] の場合, 双称は自称の単数と複数の合成形のように見える。タミール (Tamil) 語では -gal という複数の接尾辞を自称・対称共にとるが, 双称は nam という形である。これは自称の複数の古形であるらしい [FORCHHEIMER 1951: 71]。それが双称に用いられている。ドラヴィダ語族の双称はいずれも異形で

はあるが, 後に加わったと考えてよいであろう。

アフリカのソマリ (Somali) 語もここに加えることができる。Meinhof によれば複数の接辞 -in が自称 (ánna <an-in-a), 対称 (ád-in) につくが, 双称 ínna は ádin-ana である [FORCHHEIMER 1951: 74]。これは対称の複

	sg	pl		sg	pl
D		mana			nam
L	na	ma		naN	mangal
A	ni	mi		ni	ningal, nir

テルグ (Telugu) 語

タミール (Tamil) 語

図10 ドラヴィダ語族からの例

	sg	pl		sg	pl		sg	pl		sg	pl
D		ínna, inní, innú			amo(na)			kóŋn			wá
L	ána, áni, an	ánna, ánni, ánnu		aka(na)	a(na)		rán	kón		yán	wón
A	áda, ádí, ad	áydin, ádin, édin, idin		ai(na)	om(na)		jin	yên		yín	wun

ソマリ (Somali) 語

コマ (Koman) 語

ヌエル (Nuer) 語

シルック (Shilluk) 語

図11 4ND型から5ND型(2)

数と自称の単数を組み合わせたことになる。

ナイル・サハラ語族のコマ (Koman) 語では, 双称 amo(na) は恐らく, a+om(na), すなわち自称・複数と対称・複数からなると考えられる [TUCKER & BRYAN 1966: 360]。ヌエル (Nuer) 語やシルック (Shilluk) 語では双称は合成形ではないが自称・複数から派生したと思われる [FORCHHEIMER 1951: 418]。

ニジェール・コルドファン語族のフルベ (Fulbe) 語では、双称はむしろ対称から派生したとみられる [ARNOTT 1970: 36]。これは特別な例ではなく、たとえばアメリカのヨクーツ (Yokuts) 語 [FORCHHEIMER 1951: 97] もフルベ語のように対称から双称が派生したと考えられる。

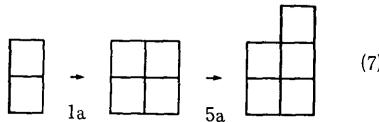
	sg	pl
D		enen
L	miin'	minon
A	aan'	onon

	sg	pl	dl
		may	mak
	na	na'an	na'ak
	ma	ma'an	ma'ak
Ab	ama	aman	amak

フルベ(Fulbe)語(独立形) ヨクーツ(Yokuts)語

図12 対称から双称の派生

以上述べた言語では、ヨクーツ語を除いて、双称の形態に変異はあるが、次のような図式とみてよいであろう。



ニューギニアには、合成形ではあるが他の人称代名詞と合成されるのではなくて、“all” や “with” がついて双称ができた例がある。Trans-New Guinea Phylum に属すトアリピ (Toaripi) 語やセポエ (Sepoe) 語、オロコロ (Orokolo) 語 [BROWN 1975] や West Papuan Phylum のマディク (Madik) 語 [COWAN 1953: 15] がそれらである。トアリピ語とマディク語の場合を例示しておこう (図13)。マディク語

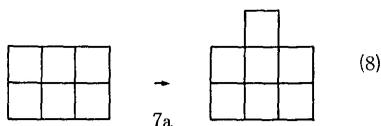
	sg	pl	dl
D		ereita	
L	ara(arao)	ela(elao)	elaka
A	a(ao)	e(eo)	euka, auka
Ab	are(areo)	ere(ereo)	ereuka, auka

	sg	pl	dl	
		menseno		
	djí	men	muwí	
	nam	nun	nuwí	
	jětětü	lětatu	djëwi	m
	goutětü			f

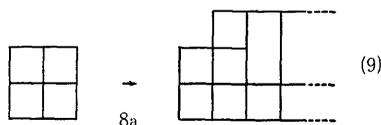
()は強調形
トアリピ(Toaripi)語 マディク(Madik)語

図13 トアリピ語とマディク語

の双称・複数 *menseno* は *men*+*seno* であり, *men* は自称・複数, *seno* は “all” の意味である [COWAN 1953: 15]。トアリビ語の双称・複数 *ereita* は, *ere*+*ita* であり, 他称・複数 (*ere*) に “with” (*ita*) のついた形でマディク語とは異なった構成になっている [BROWN 1975: 321-322]。類型としては同じように図化される。

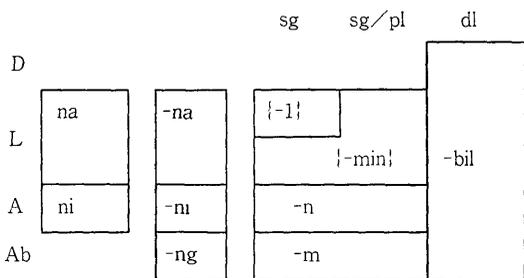


南部バントゥ諸語 [DOKE 1967] もこの点では同じタイプの変化と考えるとよいであろう。前報でも述べたように, “all” が付加するだけでなく数も付加する。そしてその数の限定が不明であるため, 特殊な類型となる。南部バントゥ諸語の場合は以下のようなものである。



ももとは 4ND 型であったものが, “all” がついて双称・複数ができると同時に, 他の数がつく。ただし, 数はもとの 4ND 型の複数につくため, 2数以上では双称はない。

ニューギニアの Trans-New Guinea Phylum に属すサルト/ユイ (Salt-Yui) 語の人称代名詞および動詞に接辞する *subject marker* などは変化の途上にある興味ある例といえる。非常に特殊な例ではあるがここにしておくことにする。



(a)人称代名詞 (b)格有格接辞 (c)主格接辞

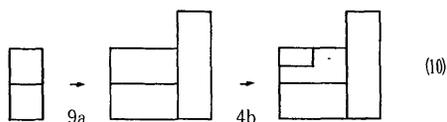
図14 サルト/ユイ (Salt-Yui) 語

る例といえる。非常に特殊な例ではあるがここにしておくことにする。

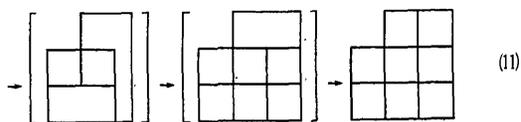
この言語では, 人称代名詞としては自称と対称 (数の区別なし) しかなく, 他称は指示代名詞が用いられている。所有格は接尾辞であるが, 図25のように他称も分化している。もっとも

よく分化しているのは動詞の *subject marker* である。この中で興味あることは自称に単数のマーカーがみられることと, 人称にかかわらない2数が存在することである。そして, 後者は2人以上の人を指す場合にも用いられる。それは「あなた」と「わた

し」を指す場合である。すなわち、双称として、数にかかわらずに用いられるということである [IRWIN 1974: 14]。サルト/ユイ語の場合は次のように発達したと考えられる。



まず 2ND 型が発生し、次に 2 数が加わる。自称において、単数のみが特に区別されるようになる。一方で 2 数は双称化しはじめる。現在の段階はここまでである。もし、このまま発達するのならば、恐らく自称の複数が区別されるようになり、ついで双称が区別される。その際、2 数の観念は強く残り、自称と対称に 2 数形があらわれてくる。最後に双称においても複数形成されると想像される。すなわち、次の図式のようにになると予想されるが、どうであろうか。

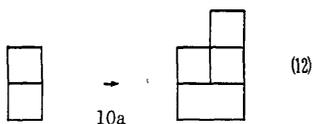


これまでに述べたような形で双称ができたのではない、別の例がアメリカの言語の中にみられる。それはクワキウトゥル (Kwakiutl) 語 [FORCHHEIMER 1951: 87; BOAS 1911: 529-530] である。この言語では、双称と自称の複数の区別は指示代名詞と組み合わせられて形成されている。この言語では指示代名詞は「話し手に近い」、「聞き手に近い」、「両者から遠い」の距離的に 3 つに分けられるとともに、「みえる」、「みえない」の要素でそれぞれがさらに 2 分される。

	sg	pl
D		-Ens
L	-En	-Enuεxu
A	-Es	

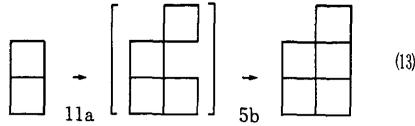
図15 クワキウトゥル(Kwakiutl)語

双称は、この最も遠いものを指す「みえる」指示代名詞と組み合わせられ、自称の複数はその「みえない」指示代名詞と組み合わせられたものである。これは次のように記すことができるであろう。



3.2.3. 自称・複数の欠如 (チベット・ビルマ語族を中心として)

先にあげたガロ語はむしろチベット・ビルマ語族では例外のようで、次に述べるような例の方が普通と考えられる。それはこれまで述べてきた様式とは異なったもので、次のような様式を基本としている。



この形では、自称の複数形を認めず、自称の複数形はただちに双称となるものである。そして、後に自称の複数の存在に気が付き、それをさまざまな形で埋めるという様式である。

さて、Bauman [1975] はチベット・ビルマ語族の人称代名詞の最も基礎となる祖形として自称には **ŋa*, 対称には **naŋ* を認めた。しかし、これらだけでは現在ある言語の人称代名詞が説明できず、属格 (genitive) を表示する形態素の加わった形を考えた。すなわち、属格の祖形として **kya* を立て、自称には **gyaŋa* (<**kyana*), 対称には **kyana* を立てた。また、双称の要素および複数の要素として **i* を復元した。この **i* は、かなり問題のある要素であり、「近い」ものを指す指示詞の祖形でもあり、それに対応する **u* は「遠い」ものを指す指示詞であり、これらが双称・複数と自称・複数の区別に用いられたかもしれないとしている [BAUMAN 1975: 182-184]。

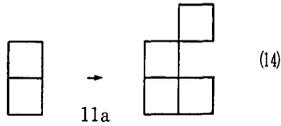
具体的に1つの例を示してみよう。東部ヒマラヤ語群のトゥルン (Thulung) 語 [BAUMAN 1975: 125-129] の場合、図16のようになる。自称・単数 *go* は **gaja* (<**gyaŋa*) から、対称・単数 *gana* は **kana* (<**kyana*) から派生したと考えられ、対称の複数形は *gani* (<*gana* + **i*) であると考えられる。すると自称の複数形は同様に *go* +

	sg	pl	sg	pl	dl	sg	pl	sg	pl	sg	pl
D		goi	goi	gosi			kai		kai		kani
L	go	goku	go	goku	gosuku	ka, ka-ŋa	ka	ka, kaja, iŋ-ka	ka	ka	
A	gana	gani	ga	gani	gasi	ana	ana-i annimo-i	khana	khana-i khain-i	inkhi, 'nkhi	inkhi-ni
	トゥルン (Thulung) 語		バヒン (Bahin) 語			ナチェレン (Nachhereng) 語		ロドン (Rodong) 語		ヤッカ (Yakka) 語	

図16 チベット・ビルマ語族からの例

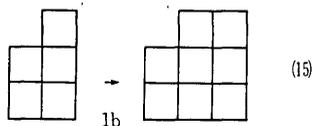
**i*>*goi* となるはずであるが、これは双称となっている。私は **i* は双称の要素ではなく、実は単に複数の要素とみた方が良いのではないかと考えている。そして、トゥル

ン語の複数化はまず次のようにして起った。



すなわち、この言語では自称の複数はないと考えられたのである。この考え方が双称を形成させる重要な要因である。しかし、いずれ自称の複数の存在に気が付くと、双称とは異なった形を造り出す必要があった。その時、*i が「近い」ものを指す指示詞であるという連想が、*u をその形を造る時に使わせたのではないであろうか。ku は *u と相関するものとみるわけである。そうすると、トゥルン語の場合は先にあげた(13)のような図式になる。

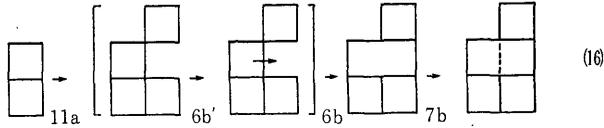
次にトゥルン語に近いバヒン (Bahin) 語 [BAUMAN 1975: 125-129] をみてみよう。対称・単数が ga で gana と異なる以外は単・複に関してはトゥルン語と同じである。2数は *si という要素である [BAUMAN 1975: 103]。双称・2数は go+*si, 対称・2数は go-ku の間に su<*si+*u が入っている。チベット・ビルマ語族では属格を表示する形態素のあとに数を表示する形態素が入るという場合が多く、この場合ならば、go+*si+*u+ku>gosuku となったと考えられる。このような例はいくらでもみつけ出すことができ、例えばリンブー (Limbu) 語では自称・2数は an-ci-ge であり、ci は2数を示す。またロホロン (Lohorong) 語の自称・2数でも ka-ci-ka で同様の形をもつ [BAUMAN: 1975: 126-127]。バヒン語は次のような過程と考えてよいであろう。



ところで、このようなバヒン語が存在すると、トゥルン語はバヒン語から2数形が脱落した形とも考えられるが、どちらにしても証拠がない故に、一応このままにしておく。

次に移る前に (13) を経過する例をもうひとつあげておこう。それはナチェレン (Nachhereng) 語とロドン (Rodong) 語 [BAUMAN 1975: 124-127] の場合である。これらの自称・単数は、ナチェレン語では ka<*kyaga, ロドン語では inka<*gaga, 対称・単数は、ナチェレン語では ana<*kana, ロドン語でも khana<*kana であり、対称の複数形は anai<ana+*i, khanaik<khana+*i であるが、自称の複数と予期さ

れる $ka+i)kai$ は双称となっている。そして、自称の複数には単数形が入っている。これは次のように考えられるであろう。



(13)までは同じであるが、新しい形の語が自称・複数に入るのではなく、自称・単数がそのまま複数にも用いられている形である。そして、最後の段階では、 ka 以外の $kaja$ などが出現して再び自称において数における区別をしようとしているのではないであろうか。

興味ある例は、ヤッカ (Yakka) 語 [BAUMAN 1975: 126-127] である。この例では、双称と対称の複数には $-ni$ がみられる。しかし自称には単数の区別はない。先の例の自称・単数の分化も起していない例と考えてよいであろう。

チベット語群のうちから関係する4つの例 [BAUMAN 1975: 142-146] を選んで考えてみよう。プリック (Purik) 語とバルティ (Balti) 語とはほぼ同じような構成か

	sg	pl
D		gatäg:
L	ɟa:	ɟaca
A	khērān	khintäg
	yeraj	yantäg

プリック(Purik)語

	sg	pl
D		ɟadaɟ
L	ɟa	ɟaya
A	khyaj	khidaɟ
	yaj	yidaɟ (respect)

バルティ(Balti)語

	sg	pl
L	ɟa	ɟaca:
A	chö	chöca:

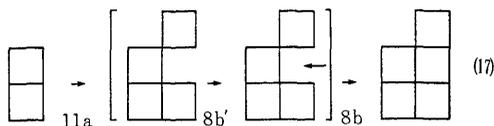
デンジョン (De'jong Ke)語

	sg	pl
L	ɟa	ɟaca
A	khoid	khoiža

ラーフル(Lahul)語

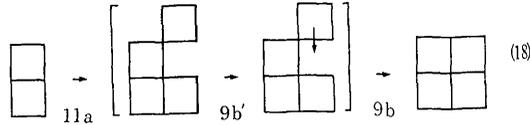
図17 チベット語群の4つの語

らなる。双称と対称の複数には $-taj$ あるいは $-daɟ$ という要素をもっているが、自称・複数には $-ca$ または $-ya$ という要素がみられる。この $-ca$ や $-ya$ は他の2つの例、デンジョン (De'jong Ke) 語やラーフル (Lahul) 語の複数形にみられる $-ca$ と同種類のものであろう。これらは $-taj$ や $-daɟ$ よりも古い複数の要素であるらしい [FORCHHEIMER 1951: 82]。これらのことからプリック語やバルティ語は次のような過程で変化したと考えられる。



これらの言語では遷移形の自称・複数埋めるために、古い複数形を用いたのか、ある

いは他の隣接する言語から借用したと考えられる。一方、デンジョン語やラーフル語は、



のようであり、自称・複数には双称・複数が用いられたと考えられる。

勿論、自称・対称の単純な複数化(1)とも考えられるが、今まで述べてきたように、チベット・ビルマ語族には自称の複数を認めない認識があったと考えられる。それがここにも出現したと私はみたわけである。

次に前稿でも少しとりあげたカヌアリ (Kanuari) 語とその方言 [BAILEY 1975 (1915): 80; FORCHHEIMER 1951: 85] について少しくふれてみよう。まず、それぞれの語彙を祖形と対応させて考えてみると、自称・単数の *ga, gö, gū* は恐らく **gaŋa* から派生したのであろう。自称・複数の *ni* は **ŋa+i* であると推測されるが、*niŋa*

	sg	pl	dl	sg	pl	dl	sg	pl	dl	sg	pl	dl
D		kišap(a)	kašap		kišöŋa	kašöŋ			kašū		gā(ni)	niniŋ
L	ga	niŋa	niši	gö	nina	niši	ga, gū	kišu	niši	gā	(ni)	niši
A	ka	kina	kiši	ka	kina	kiši	ka	kī	kisi	kan		
				ku								

標準カヌアリ語
(Standard Kanuari)

(polite) 中央カヌアリ語
(Central Kanuari)

低地カヌアリ語
(Lower Kanuari)

チトゥクリ語
(Chitkuli)

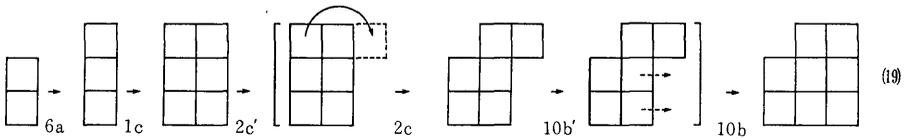
図18 カヌアリ語とその近隣の言語

や *nina* は **ŋa+i+ŋa(?)* のようで、不明の *ŋa* が付加している。自称・2数 *niši* <**na+i+ši* で問題はないであろう。また、対称・単数の *ka* や *kan* は **kana* から派生したと考えられる。対称・複数 *ki, kina* や対称・2数の *kiši* も問題ないであろう。双称がやや複雑である。双称・2数に *niniŋ* という形がみられる。**g-nis* という「2」[BAUMAN 1975: 103] という意味の語が付加したとも、あるいは *ni* の繰り返しも考えられるが不明である。さらに、双称には *ša, šö, šū* という2数マーカーがみられること、しかもそれらは **ši+u* と考えられ、**u* は「遠い」ものを指す指示詞であり、Bauman の述べている双称と自称の区別の反対の例となる。

ところで、双称・複数には複数マーカー以外に2数マーカーがあることは自称・対称の複数と非常に異なった点である。これをどのように理解したらよいであろうか。さらに、双称の2数マーカーに **u* の要素が入っているのをどう説明すればよいのか。

カヌアリ語の例だけは他のチベット・ビルマ語族とは少し異なった変化と考えた方

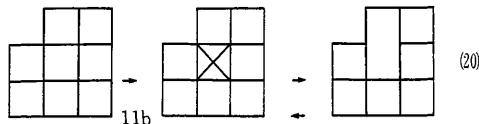
がよいようである。まず、自称として *ŋa と *gyaŋa, 対称には *kana があった。自称は *gyaŋa から ga や go が派生し、対称では *kana から kan や ka が派生してきた。次いで複数化が起った。自称・複数の ni は *ŋa + *i, niŋa や nina はそれに不明の接辞 -ŋa が付加したものと考えられる。一方、対称は ka + *i > ki のように形成された。そのとき、自称の複数というのは、実は双称の複数であったかもしれない。そして、さらに自称と対称に2数が出現する。ni + *ši > niši, ki + *ši > kiši が同じ過程で進行する。双称はどこで出現したか。双称・2数 kašaŋ と双称・複数 kišaŋ を考えてみると、kišaŋ には複数要素と2数要素が2つとも入っている。それからいえば、kišaŋ が kašaŋ より早く出現するとは考えにくい。すると、kašaŋ が先である。しかし複数要素はない。とすれば、複数化する前に形成されたかもしれない。想像上の発展の図式を示すと次のようである。



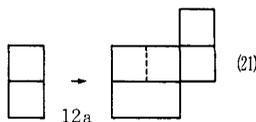
(図の中で、→の印は移動したこと、あるいは他から移入したことを示し、⇨はその元から派生したことを示している)

まず、双称(単・複の区別なし)が出現する。その際、双称は2人からなるとして2数 *ši が加えられたと考える (*kyaŋa + *ši + *u > *kaŋa + šu > kašaŋa > kašaŋ)。このとき *u の付加はむしろ *i に対して双称要素とカヌアリ語では考えられたのかもしれないが、それは例外であり、不明としておこう。次いで全ての人称が複数化し、双称については、kašaŋ + *i > kišaŋ となる。その後、双称・単数は2数であることに気がつかれ、自称・対称にも2数が生まれる。このように考えれば、*u の説明を除いて先にあげた疑問点は答えられるのではないだろうか。

なお、低地カヌアリ語は自称・複数が脱落した形であり、次のように図式化される。



チトゥクリ語の場合は特殊な形であり、前報に述べたように、



となったものであろう。複数形が単数をも意味するようにはなるが、その反対の例はまず起らない。それ故、対称においては複数化が起っていないとみるべきであろう。同様に自称においては複数が入りかかっている状態を示していると考えられる。そして、双称・2数、自称・2数のみの区別がされている。恐らく、これは他からのインパクトで形成されたものであり、独自の発達ではないと考えられる。

チベット・ビルマ語族以外にも、このような形式はみられる。メキシコのオトミ(Ötomi)語 [FORCHHEIMER 1951: 89-90] では、複数、2数において、双称、

	sg	pl	dl
D		-gohö	-gowi
L	-go	-gohe	-gobe
A	-ge	-gehö	-gewi
Ab	-nö -ko	-yö	-wi

オトミ(Ötomi)語

	sg	pl
		-kt
	-kn	kəx'
	-k	-kp

シュスワップ(Shuswap)語

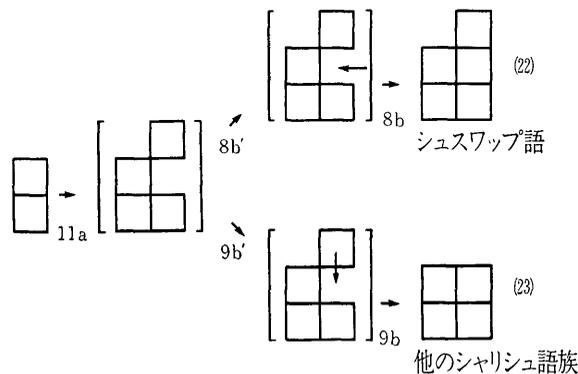
	sg	pl	dl
		gâge	gâhe
	no	nâgâ'	nâhâ'
	go	goge	gohe
	e	yage	yahe

カーテ(Kate)語

図19 自称・複数の欠如の例

対称、他称は規則的に -ho, -wi が付加するが、自称だけは -he, -be と少し異なっている。自称の複数・2数は双称のそれを少し変えることによって造られたと考えられる。

また、シャリシュ語族のシュスワップ(Shuswap)語の自称・複数は明らかに不規則である [KUIPERS 1974: 44]。これも後に埋められたものであろう。なお、シャリシュ語族の他の言語 [NEWMAN 1977] は4ND型であることは、一度は双称・複数として形成されたものが、双称・複数が自称・複数にも用いられるようになったとも考えられる。



	sg	pl	sg	pl	di
D					mí kplé wo
L	nye.	mí-a-wo	nye	mí-a-wo	mí kplé eya
A	wò	mí-a-wó	wo	mí-a-wó	mí kplé eya
Ab	eyá, yé	wó-a-wo	eyá, yé	wó-a-wo	wo kplé eya, eya kplé eya, eya kpli

エウエ(Ewe)語

	sg	pl	sg	pl	dl	
D				se	scanyi	sú
L	me	se	me	se	seabo	sumo
A	ǒé	nyi	ǒé	nyi	nyiabo	nyimo
Ab	mo	bo	mo	bo	bobo	bumo

ンコシ(Nkosi)語

	sg	pl	sg	pl	dl
D			benonei	bena	beno
L	me.	beše	me	beši-ne	beše-nei
A	(g)we	be(g)we	(g)we	be(g)we	
Ab	(d)ye	bo(ni)	(d)ye	bo(ni)	

ケレ(Kele)語

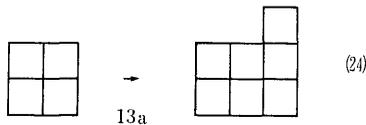
図20 発達した合成形の例

オトミ語に似た例はオーストラリアにもみられる。たとえばカーテ (Kata) 語 [FORCHHEIMER 1951: 94-95] では、自称の複数・2数のみが不規則である。これなどもオトミ語と同様の例と考えられる。なお、オーストラリアの言語については次項にまとめてある。

3.2.4. 発達した合成形

アフリカには自称、対称、他称のさまざまな組み合わせによる合成形がみられる。まず、エウエ (Ewe) 語 [FORCHHEIMER 1951: 98-99] では双称・2数は *we+thou*, 自称・2数は *we+he*, 対称・2数は *you+he*, 他称・2数は *they+he* となっている。ただし、他称・2数は他に *he+he* という形も存在し

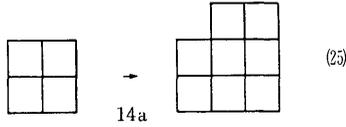
ている。それ故に、次のようになったと考えられる。



次に、ンコシ (Nkosi) 語 [FORCHHEIMER 1951: 100-101] では、

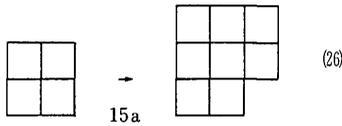
- sū* < *sú + ǒé* : *we+thou*, *nyimo* < *nyi + mo* : *you + he*
seanyi < *se + nyi* : *we+you*, *nyiabo* < *nyi + bo* : *you + they*
sumo < *se + mo* : *we+he*, *bumo* < *bo + mo* : *they + he*
seabo < *se + bo* : *we+they*, *bobo* < *bo + bo* : *they + they*

となり、結果として 8Dns 型となる。

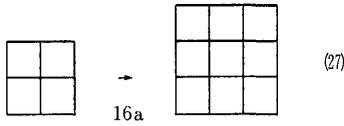


ケレ (Kele) 語 [FORCHHEIMER 1951: 99-100] では自称・複数と対称・他称の単複が組み合わせられた形のみが存在し、図20のようなになる。合成形は次のようである。

beno : we+thou, bena : we+you, beši-nei : we+he
 beši-ne : we+they, benonci : we+thou+he



最後の例はンゲンバ (Ngemba) 語であるが、これはすでに前報 [吉田 1983: 349] で述べた。この例では次のようになる。



3.3. 双称型の発達

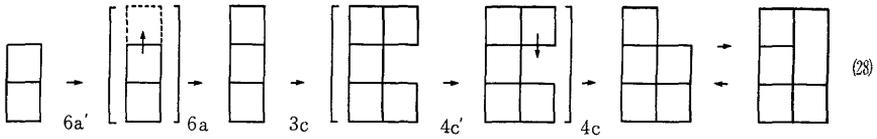
3.3.1. 北アメリカの言語から

まずはアメリカの言語からとりあげてみよう。ラコタ (Lakota) 語とウィンネバゴ (Winnebago) 語の場合はよく似ていながら少し異なっている。ラコタ語の場合は、

	sg	pl	dl		sg	pl	sg	pl		sg	pl
D			u ⁿ -		u ⁿ -		u ⁿ -	u ⁿ -pi		hi ⁿ -	hi ⁿ - -wi
L	ua-	u ⁿ -pi		→	ua-	u ⁿ -pi	ua-		→	ha-	ha- -wi
A	ya-	ya- -pi	←		ya-	ya- -pi	←	ya-	ya- -pi	ra-	ra- -wi
Ab	-	-pi			-	-pi	-	-pi		-	-wi
	(a)				(b)		(c)				
					ラコタ(Lakota)語					ウィンネバゴ(Winnebago)語	

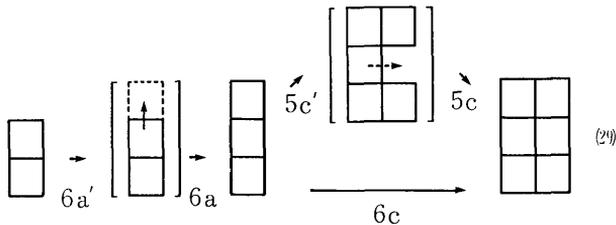
図21 ラコタ語とウィンネバゴ語

u^n - が2数形として図21 (a) のようにはみ出した形で記述されている [FORCHHEIMER 1951: 75-76] が、むしろ単数性として (b) のように移してもよいであろう。さらに u^n - π は双称と自称との両方に用いられると考えれば (c) のようになる。このように書き換えてゆくと、次のようなプロセスを経たことはごく自然に納得ゆくのではないだろうか。

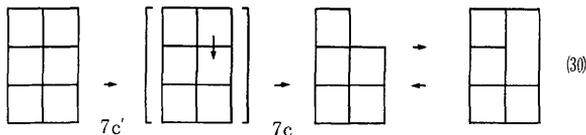


まず、自称から双称が派生したと考えられる ($ua \rightarrow u^n$)。その後複数化が起るが、自称には複数形はつくられない。後に自称の複数の存在に気付かれるが、それには双称・複数が用いられるようになる。

ウィンネバゴ語 [FORCHHEIMER 1951: 58] の場合は少し異なる。この言語では自称にも複数形がみられる。



双称がまず造られるまではラコタ語と同じであるが、複数化において一気に自称も複数化を起したのか、あるいはラコタ語と同様の過程が一度起り、後に自称も複数化されたとみるか、どちらも可能である。私はラコタ語の場合を考えて、むしろ後者の方ではないかと思う。ただし、ラコタ語が次のような過程によってできたとも考えられる。



すなわち、複数において自称と双称の間で中和が起り、結果として双称の複数形のみが残ったという過程である。しかし、私は (29) のような過程の方が可能性が高いと

	sg	pl
D	ta-	ta- -taʔm
L	a-	a- -taʔm
A	mi-	mi- -taʔm
Ab	—	-yah

シェラ・ポボルカ(Sierra Popoluca)語

D	tami	tagwa
L	ni	nimʔi
A	imi	mʔimʔi
Ab	aya	ami

南部パイウト(S. Paiute)語

	dl	
D	damé	dau
L	né	namé
A	én	pémé
Ab	sur	sure

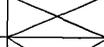
ショショニ(Shoshone)語

	sg	pl	dl
D		twa-	t(e)-
L	k-	yakwa-	yaki-/yaku-
A	s-	swa-	si-/su-
Ab	ra-/ka-	kawa-	hi-/hu-

イロコイ(Iroquoian)語

L	si	hweni	noi ani
A	nyen	nuhnu	
Ab	èn, i	ène, i	

独立形

L	s-	ne-	noh-
A	n-	nuh-	
Ab	u-, ye-, te-	pe-, rhi-	

所有格
カリエル(Carrier)語

図22 アメリカの言語から

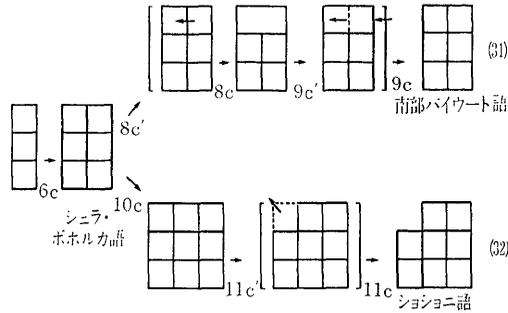
思う。

次に南部パイウト (S. Paiute) 語, シェラ・ポボルカ (Sierra Popoluca) 語, ショショニ (Shoshone) 語をとりあげてみよう。シェラ・ポボルカ語 [FORCHHEIMER 1951: 63-64] では全ての人称に規則的な人称がみられる。先のウィンネバゴ語と同様とみてよい⁴⁾。南部パイウト語 [FORCHHEIMER 1951: 59-60] では -mi は複数の接辞とみられるが, 双称の単数に -mi がみられる。これは一度はシェラ・ポボルカ語のように複数化を起すが, やがて双称の複数形が単数形と中和を起し, 後には単数形が消えてしまう。しかし, その後に新しい双称の複数形が造られ, もう一度単・複に分化したのではないであろうか。

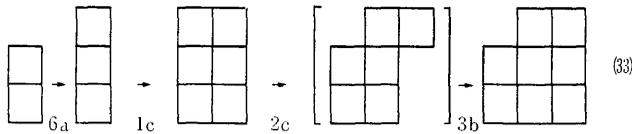
ショショニ語 [FORCHHEIMER 1951: 60-61] の場合は, -me は複数, -ux は2数の接尾辞であり, da は他にみられた ta と同じもので双称を示すものであろう。この場合は, まずシェラ・ポボルカ語と同じように複数化 (6c) が起る。その後さらに2数化 (10c) が起る。しかし, 双称において単数と2数の区別があいまいとなり, 単

4) シェラ・ポボルカ語は前報で 5Dns 型としたが, 6Ds 型と改める。

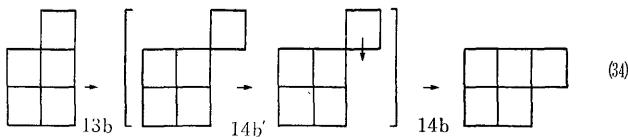
数が消えたと考えられる。



イロコイ (Iroquoian) 語 [FORCHHEIMER 1951: 79-80] の場合はショショニ語とよく似ているが、先に述べたオーストラリアの Pidgin と同様の過程と考えられる。一旦 6Ds 型ができるまではショショニ語と同様であるが、次に双称・単数が2数に移り、他の人称も2数が造られる。その過程は次のようである。



少し異なった例であるが、カリエル (Carrier) 語 [FORCHHEIMER 1951: 51] をここに加えておこう。この言語では自称・2数のみが不規則である。そして、これには -ni の接尾辞をもち、それは自称、対称の複数形にもみられるものである。これは次のような過程を経たものと考えられる。



すなわち、自称・2数 **norhni** はもともと双称の複数であったが、後に2数とみなされ、さらに双称の意味を失って自称化したと思われる。

3.3.2. マヤ諸語の場合

次に資料のよくそろっているマヤ諸語について考察してみよう。

	sg	pl	sg/pl
D			*qe/q
L	*in/inw	*qe/q	*in/inw
A	*a/aw	*c/er	*a/aw
Ab	*s/r		*s/r

(初頭子音幹/初頭母音幹,以下同様)
 a) 八杉説 b) 新しい意味づけ

図23 マヤ (Maya) 諸語の人称代名詞Aの祖形

マヤ諸語については八杉 [1980] の論文を用いることにする。マヤ諸語は大きく、低地マヤ諸語と高地マヤ諸語に分けることができる(言語名のあとの高・低はこの区別を指す)。そして、それ以外にワステコ・グループがあり、独立したグループとされている。

マヤ諸語の人称代名詞は動詞の義務的要素で、普通2種類(A, B)が区別されている。人称代名詞Aは他動詞の主語あるいは所有代名詞として用いられ、Bは他動詞の目的語あるいは自動詞・状態詞の主語として用いられる。また、発生的には指示詞と思われるものにBがついた独立人称詞があるが、ここではもっともよく区別されているAを取り上げる。

さて、八杉はマヤ諸語の人称代名詞Aを比較して、Aの祖形を図23(a)のように考えた。そして、自称・対称の複数形は新しい形であると考えている。しかし、私は(b)のようではなかったかと考える。その違いは、ひとつに私は全ての現象を説明しようとしているのに対して、八杉は大多数の言語が持つ人称代名詞の形態と意味をすなおに説明できればよいとみていることにあり、今ひとつに八杉は双称という概念を過小評価したことにあると思う。

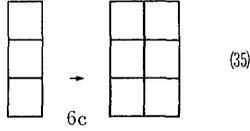
まず、ラカンドン(Lacando'n)語(低)からみてみよう。マヤ諸語の中で唯一の

	sg	pl	sg	pl	sg	pl
D	ək	ək...e'ex		k		h/k...tik
L	in/(in)w	in/(in)w...o'	in/inw	k...e'ex	h/k	h/k...tikotik
A	a/aw	a/aw...e'ex	a/aw	a/aw...e'ex	a/av	a'av...ik'
Ab	u/(u)y	u/(u)y...o'	u/uy	u/uy...o'ob	s/y	s/sy...ik

ラカンドン(Lacando'n)語 ユカテコ(Yucateco)語 ツォツィル(Tzotzil)語

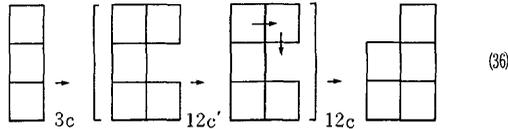
図24 マヤ諸語からの例(1)

2数の人称代名詞をもつ言語である(図24)。複数形は非常に規則的で、双称・対称では-e'exが、自称・他称では-o'が接辞する。これは、



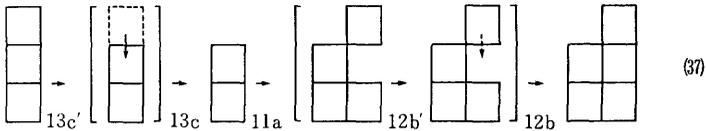
となったであろうことは容易に想像できる。

ユカテコ (Yucateco) 語 (低) は図24のようであり、これは



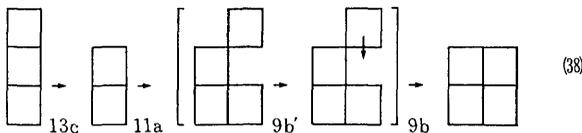
となったのであろう。すなわち、自称を除いて複数化が起る。後に、双称の複数が自称の複数として用いられるようになり、ついには自称の複数になる一方、双称・単数がその穴を埋め双称・複数となる。

ツォツィル (Tzotzil) 語, チョル (Chol) 語, トホラバル (Tojolabal) 語, チョントタル (Chontal) 語 (以上全て低地) はユカテコ語とは異なった変化を起したと考えられる。ツォツィル語の例を図24に示した。これらは、



のようであり、まず単・複の区別のない双称と自称との間で中和が起る。そして、減退の項でみられるように、より丁寧な双称が自称にとってかわったと思われる。その後、複数化を起すが自称の複数は造られない。次に自称・複数の存在に気がつき、双称・複数から新しい形が派生したのであろう。自称・複数の接尾辞のみが不規則なのはそのためである。

次にツェルタル (Tzeltal) 語 (低) を考えてみよう。八杉によれば図25 (a) のようである。この場合は次のように考えられる。



まず、双称は自称と中和し、丁寧な形として双称の方が残り、そして複数化が起るのはツォツィル語と同じである。ただ、自称・複数に新しい形が派生せず、双称・複数

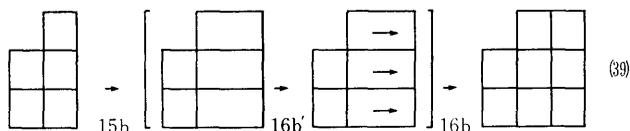
	sg	pl	sg	pl	dl
D				h/ ~k...tikit	h/ ~k...tik
L	h/k	h/k...tik	h/ ~k	h/ ~k...ho ² otikik	h/ ~k...otik
A	a/aw	a/aw...ik	a ² / ~a ² w	a ² / ~a ² m...ikik	a ² / ~a ² w...ik
Ab	s/y	s/y...ik	s/ ~y	s/ ~y...ikik	s/ ~y...ik

(a)〔八杉 1980〕 (b)〔BERLIN 1963〕

図25 ツェルタル (Tzeltal) 語

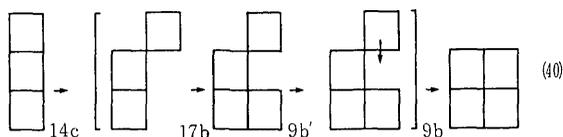
が自称・複数にそのまま用いられた点が異なる。

興味深いのは Berlin [1963] の示すツェルタル語の人称代名詞である。Berlin に従えば図25 (b) のようになる。この場合ならば、5Dns 型になるまではツォツィル語の場合と同じであるが、そのあとが異なる。



複数形は「2人またはそれ以上」という意味（2数性複数）にとられ、2数化が進み始める。そして、-ki- をとって「3人またはそれ以上」という3数性複数があらわれる。Berlin によれば、2数性複数は完全な2数になりきっておらず、2数性複数のままである過渡的なものと考えられる。すなわち、2数性複数が2数になれば8Dns型、3数性複数が脱落すると5Dns型となる過渡的なものであろう。なお、前報ではマヤ諸語のうちツェルタル語だけはこの Berlin の資料を用いている。

高地のマヤ諸語の多くは以上述べた過程とは異なった発展をみせたと考えられる。他称を除くと2つの下位グループに分けられる。対称が接尾辞によって複数化するものと、語彙的に変化して複数化するものである。前者の例としてウспанテコ (Uspanteco) 語(高)、後者の例としてチュフ (Chuj) 語(高)の例をあげておく(図26)。そして、前者は次のように図化される。



先の例と異なるのは、双称がそのまま複数になり、新たな双称・複数形はみられない点である。一方、低地の言語に多くみられたように、対称は接尾辞が用いられて複数

	sg	pl
L	hin/w	ko/k
A	ha/h	he/hey
Ab	s/y	

チュフ(Chuj)語

	sg	pl
L	in/w	qa/q
A	a/aw	a/aw...aq
Ab	ru/r	ru/r...aq

ウスパンテコ
(Uspanteco)語

	sg	pl
D		q
L	n/w...{y}e	q...{y}e
A	t...{y}a	ky...{y}e
Ab	t	ky

мам(Mam)語

	sg	pl
L	u	i
A	a	
Ab	in	

(a)人称代名詞A

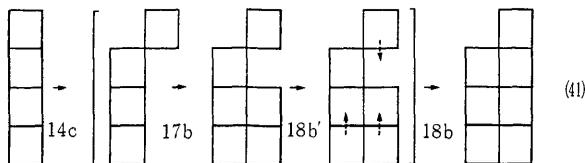
	sg	pl
L	nana'	wawachik
A	tata'	xaxachik
Ab	haha'	hahachik

(b)独立人称代名詞
フステコ(Huasteco)語

図26 マヤ諸語からの例(2)

(Jacalteco) 語, カンホバル (Kanjobal) 語, イシル (Ixil) 語 (以上, 高地) であり, 他称まで語彙的に異なる複数形をもつものには, チョルティ (Chorti) 語 (低), アカテコ (Acateco) 語, テコ (Teco) 語, アクアカテコ (Aquacateco) 語, ケクチ (Kekchi) 語, ポコムチ (Pocomchi) 語, ポコムム (Pocomam) 語, アチ (Achi) 語, キチュ (Quiche) 語, ツトゥヒル (Tzutujil) 語, カクチケル (Cakchiquel) 語 (以上, 高地) がある。恐らく八杉はこれらの例から先の祖形を復元したのであろうが, 低地マヤ諸語でみたような例は *qe/q を自称・複数と考えると説明ができなくなってしまう。

мам (Mam) 語 (高) の場合は少し不規則である。他称から派生した対称の尊称があらわれ, もともとの対称は親称となり, ついには消えてしまう。そのため, 対称と他称がよく似た形となっている。мам語の他称を含めて図化すると次のようであろう。



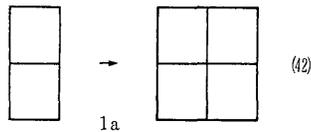
単・複の区別のない双称が複数化し, 対称にも複数が出現する。しかし, 自称・複数 は形成されない。ここまでは(40)と同じである。後に他称からより丁寧な対称が派生する一方, 同じ方法で, 双称・複数からより丁寧な自称・複数が形成された。対称で

化する。後に八杉のツェルタル語のように, 自称の複数に別の形が造られるのではなく, 双称・複数がそれに用いられる。この例に入るものに, イツァ (Itza') 語 (低), モパン (Mopa'n) 語 (低) などがある。

後者の場合も (40) と同じであるが, 語彙的に異なる語が対称に造られる点が異なる。まず, 双称が非単数と認識され, 複数化するのウスパンテコ語と同じであるが, 双称の複数に対応して対称の複数化が進み, 双称の複数と同様に (双称・複数 は自称の複数と考えられて) 語彙的に異なった形が造られる。その複数化が他称にまでおよぶものと, 自称・対称でとどまったものがある。後者にはチュフ語, ハカルテコ

は、もともとの対称と他称から派生した対称の共存状態が続き、やがてもともとの対称は脱落した。やっかいなのは自称・単数が $n/w...(y)e$ という形をもつことであるが、私はこれは二次的に発生したものであろうと思う。 $n/w...(y)e$ は自称・複数であるはずがない。なぜなら、他称の単・複は語彙的に異なるように、もし自称・複数が形成されていたなら $*e/er$ に対応するものであるはずであるからである。それ故 $n/w...(y)e$ が別のところから移ってきたのではなく、同じ位置のままで二次的に変化したとしか考えられない。

残るのはワステコ (Huasteco) 語の場合である。人称代名詞 A では図26 (a) のようになるが、独立形では図26(b) のようである。A の方の説明は非常に難しい。しかし、独立形の方をみると次のようであると考えられる。ただし、これは恐らく二次的な発展であろう。



さて、ワステコ語を除いたマヤ諸語の場合をまとめると図27のようになる。これでマヤ諸語の場合はだいたい説明がつくと思うが、どうであろうか。

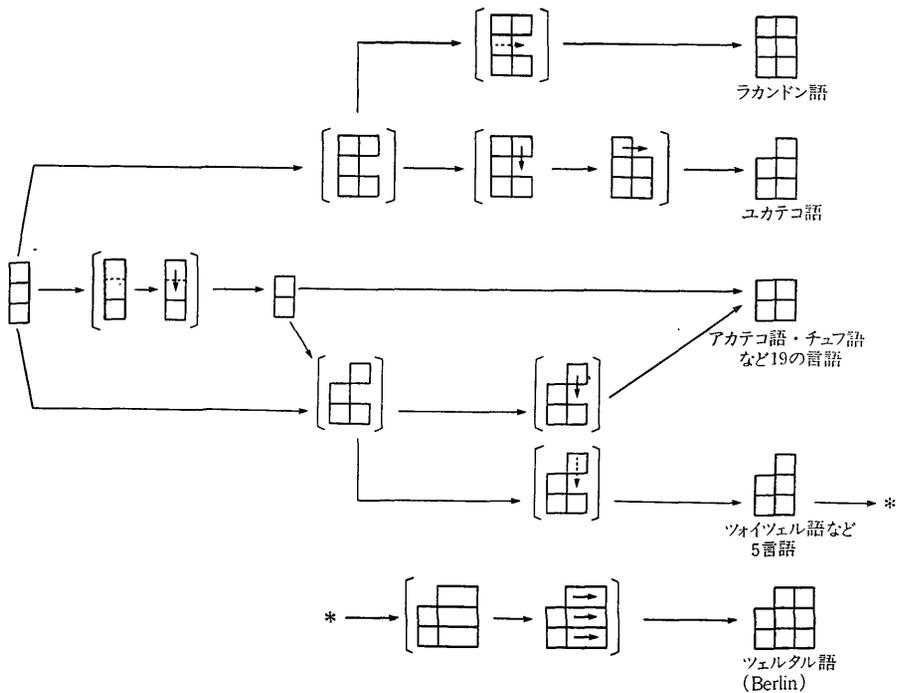
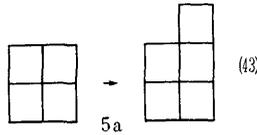


図27 マヤ諸語の種類の発展のまとめ

3.3.3. オーストロネシア語族の場合

次にオーストロネシア語族に目を転じてみよう。この語族ではいくつかの人称代名詞の祖形が再構成されている。その中で本論に直接関係する2つの再構成形を取り出したのが図28である。Forchheimer は双称 *kita は k+ita<k+itu で itu は指示代名詞（遠い方）ではないかと疑問をなげかけている [FORCHHEIMER 1951: 52]。もしそうであるならば、Proto-Austronesian は次のようにしてできたことになる。



しかし、この点はきわめてあやしく、Dempwolff らが再構成した人称代名詞から出発の方がよいと考えられる。

さて、オーストロネシア語族全体としては 5Dns 型が最も多かった。これらのほとんどは Dempwolff [CAPELL 1976: 14] の祖形で説明可能であろう。ただし、ニューギニアでパプア系言語と接する語の中には、それで説明できないものが少なからずみられる。次に多いのは 8Dns 型であった。特にメラネシア語群、ポリネシア語群に多い。その中で、ポリネシア語群のものは、Pawley [1969] が再構成した 11Dns 型から退化した 8Dns 型が多いと思われるが、メラネシア語群のものはそうであるとは限らない。むしろ、Dempwolff の祖形から発達した 8Dns 型と考えられる。

これらの具体例をあげて検討してみると、ウリピブ (Uripiv) 語は祖形の複数形をもつ 8Dns 型であるが、アウルア (Aulua) 語 [RAY 1926: 275] では複数形は -til /-tul (3の意味) の接辞した形でしめられている。興味深い例はフィウ (Fiu) 語 [RAY 1926: 489] で、複数形には祖形と一致する形と、-lu をもつ3数形の2つが共存している。これは、11Dns 型から 8Dns 型に変化する過程にあるものであり、

	sg	pl	sg	pl	dl	tr
D		*kita		*ki(n)ta	*ki(n)tadua	*ki(n)tatolu
L	*aku	*kami	*i-nau	*kami	*kamidua	*kamtolu
A	*kaw	*kamu	*i-koe	*kam(i)u	*kamudua	*kamtolu
Ab	*iya	*i'ida	*ia *imia	*(k)ida	*(k)idadua	*(k)idatolu

Dempwolffの Proto-Austronesian (CAPELL 1976: 14)

PawleyのProto-Eastern Oceanic (Focal) (PAWLEY 1969: 37)

図28 オーストロネシア語族の人称代名詞の祖形

	sg	pl	dl
D		nam	keru
L	inu, nu	kem	komru
A	nik	kami	kamru
Ab	ni	nini	nueru

ウリピブ(Uripiv)語

	sg	pl	dl
		ikia, kia	keru
L	inau, nau, ku	kami, kamilu	kamiro
A	ioe, oe, o	kamu, kamulu	kamuro
	inia, nia	kira, kirulu	doro, kiro

フィウ(Fiu)語

	sg	pl	dl
D		antil	anturua
L	anu	amintil	amarua
A	egeo	amuntul	amurua
Ab	hena	hera	arua

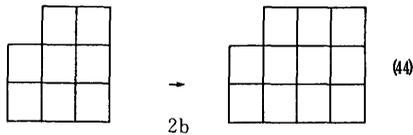
アウルア(Aulua)語

	sg	pl	dl	tr
		ketaha	krau	ketahar
L	iau	kemaha	kemrau	kemrahar
A	ik	kemyaha	kemirau	kemirahar
	in	iraha	irau	irahar

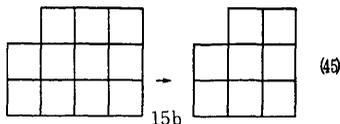
クワメラ語(Kwamera)語

図29 メラネシア語群からの例

この中で3数形が残ればアウルア語に、祖形の複数形が残ればウリピブ語のようになる。それ故、ウリピブ語のような場合も11Dns型から退化したということも充分にあり得るが、メラネシア語群ではアウルア語のような形よりもむしろウリピブ語の形をとるものが多い。例えば、ウリピブ語と同じように複数形が祖形と一致する8Dns型にはリフ(Lifu)語、イアイ(Iai)語、エロマンガ(Eromanga)語、バキ(Baki)語、メアウン(Meaun)語、マル(Malu)語などがあるが、3数形が複数になっている8Dns型は、アロシ(Arosi)語、ングナ(Nguna)語ぐらいである[RAY 1926]。



一方、ポリネシア語群では、サモア(Samoan)語、マオリ(Maori)語、ハワイ(Hawaiian)語、スクオロ(Nukuoro)語、ピキラム(Pikiram)語、ヌグリア(Nuguria)語、シカイアナ(Sikaiana)語、モイキ(Moiki)語、ピレニ(Pilheni)語、マエ(Mae)語、ウヴェア(Uvea)語、ウォーリス(Wallis Is)語、ホーン(Horn Is)語、トンガ(Tonga)語など[RAY 1919-1920]、いずれも3数形が複数となっている例であり、11Dns型から退化したものとみてよいであろう。



しかし、クワメラ (Kwamera) 語 [RAY 1926: 148-149] のように面白い例もある。11Dns 型ではあるが、祖形と一致する複数形はみられず、かわりに4数形が複数形となっている。これは、一度祖形と一致する複数形を脱落させた後に、二次的に4数形を派生させたように思われる。先にあげたアウルア語では、もし3数をあらわしたときは、til/tul をもう一度繰り返せばよい。例えば、antil til といえ、3数形となる [RAY 1926: 149]。これなども、3数の二次の派生の例であろう。勿論、マーシャル (Marshallese) 語のように、オプションではあるが5数まで形成される例もある [BENDER 1969: 5, 8] し、また、ニューギニアの Pidgin のように5数以上まで進むものもある。そういう点では、一度は 14Dns 型まで進んで複数形を落し、11Dns 型になった可能性もないわけではないが、ここではクワメラ語は二次的發展とみておこう。

オーストロネシア語族の中で、さまざまな派生型がみられ、多くは祖形からなんらかの脱落をしたものとみることができ、それらについては退化の項で述べる。ここではフィリピンにみられる 6Ds 型について少しく検討しておく必要があるであろう。

フィリピンにみられる 6Ds 型の代表的な例をまずみてみよう。パンガシナン (Pangasinan) 語 [BENTON 1971: 87] の subject/topic と attributive の2つの形を図30に示した。双称・単数は明らかに *kita に一致するであろう。双称・複数 itayo は ita+yo であり、対称・複数の attributive と合成されたものである。attributive の双称・複数 tayokta+yo であり、この関係は明らかである。このように、双称・複数が双称・単数と対称・複数との合成形であるものには、パラワン・バタック (Palawan Batak) 語、ビスキッド (Binukid) 語、イニバロイ (Inibaloi) 語、ビノン

	subject/topic		attributive	
	sg	pl	sg	pl
D	itá	itayó	ta	tayo
L	ak	kamí	ko	mi
A	ka	kayo	mo	yo
.Ab	—	ira	to	da

図30 パンガシナン (Pangasinan) 語

ガン・イテネグ (Binongan Iteneg) 語、カヤパ・カリヤハン (Kayapa Kallahan) 語、ケレイキック・カリヤハン (Keleyqiq Kallahan) 語 [REID 1971]、アグサン・マノボ (Agusan Manobo) 語 [WEAVER & WEAVER 1969]、ディババウォン・マノボ (Dibabawon Manobo) 語 [REID 1971]、ムルット (Murut) 語 [PRENTICE 1971]、タガビリ (Tagabili) 語、アボルラン・タバワ (Aborlan Tabanwa) 語、タウスグ (Tausug) 語 [REID 1971]、ヤカン (Yakan) 語 [HOOKER 1975] などがあり、恐らくこの中に含まれるものに、バラングウ (Balangaw) 語 [REID 1971]、イリアネン・マノボ (Ilianen Manobo)

語 [BRICHOUX & BRICHOUX 1977], 西部ブキッドノン・マノボ (Western Bukidnon Manobo) 語 [REID 1971] がある。

しかし、勿論、これだけにとどまらない。ボトラン・サンバル (Botolan Sambal) 語 [REID 1971] の場合は、明らかに双称・単数と対称の単数との合成である。このように対称・単数との合形成をもつものには、アグタ (Agta) 語, アッタ (Atta) 語 [REID 1971] などがある。カシグラン・ドゥマガット (Casiguran Dumagat) 語 [HEADLAND & HEALEY 1974] も恐らくここに含まれるであろう。ハヌノー (Hanunóo) 語 [CONKLIN 1962] やタガログ (Tagalog) 語 [SCHACHTER & OTANES 1972] は対称との合成ではあるが、単数か複数かは不明である。

自称との組み合わせもみられる。図31のようにグイナーング・ボントック (Guinaang Bontoc) 語 [REID 1971] では、双称・単数と自称・単数との合成によって双称・複数が形成されている。しかも、奇妙なことに双称・単数は他称・複数ときわめてよく似ている。このことは何を意味するのか不明であるが、双称・単数と自称・単数との合形成を双称・複数とするものに共通してこの性質がみられる。アムガナッド・イフガオ (Amganad Ifugao) 語, バタド・イフガオ (Batad Ifugao) 語, バイニーナン・イフガオ (Bayninan Ifugao) 語, グイナーング・カリング (Guinaang Kalinga) 語, 北部カンカナイ (Northern Kankanay) 語 [REID 1971] などもグイナーング

	subject/topic sg pl		possisive sg pl		subject/topic sg pl		possisive sg pl	
D	hi'ta	hi'tamo	ta	'tamo	daq'ta, da'ta	data'ko	-ta	-tako
L	hi'ko	hi'kai	ko	'nawin	'sakqin	daka'mi	-ko, -k	-mi
A	hi'ka	hi'kao	mo	mo'yo, yo	'sakqa	daka'yo	-mo, -m	-yo
Ab	hi'a	hi'la	na	la	si'ya	daq'i'da, di'da	-na	-da

(a)ボトラン・サムバル (Botolan Sambal) 語

(b)グイナーング・ボントック (Guinaang Bontoc) 語

	sg		pl		sg		pl	
D	daqta	daqta	ta	tada	i kadua ini	i kiteq		
L	qiyaq	dakami	ku	mi	i aq	i kami		
A	qikaw	dakayu	mu	nu	i kau	i kamene		
Ab	qiggi : na	qiggi : da	na	da	i sie	i sire		

(c)イスネッグ (Isneg) 語

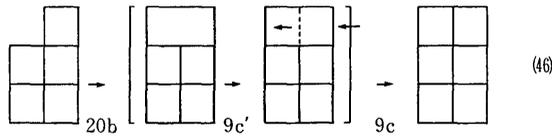
(d)サンギール (Sangir) 語

図31 5Ds 型から 6Ds 型への変異 (フィリピンからの例)

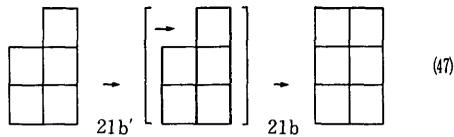
・ポントック語と同じような構成からなっている。

双称・複数が他称と組み合わせられることもまれにはある。イスネグ (Isneg) 語 [REID 1971] では双称・単数と他称・単数が組み合わされている。意味的にいえばむしろ自称となるとも考えられるが、双称・単数がすでに双称であるかぎり、実は何が加わっても双称・複数になるのであるからこれでもよいのであろう。サランガリ・マノボ (Sarangari Manobo) 語 [REID 1971] の場合は単・複は不明であるがやはり他称との組み合わせと思われる。

これらは組み合わせられるものには違いがあるが、過程としては同一とみてよいであろう。

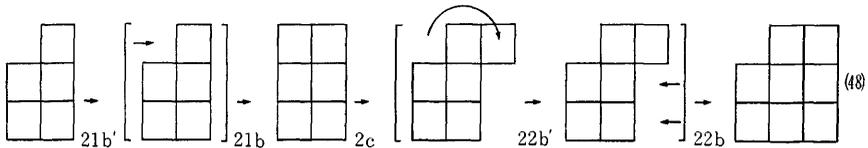


ところがこれらとは異なった例がひとつだけある。サンギール (Sangir) 語 [REID 1971] の場合である。この言語では双称・単数に *i kadua ini* (*i ka + dua(2) + ini* (この)) というような合成語が使われている。この場合は



となるのであろう。

サンギール語によく似た形をもつが、異なった種類のものがある。サランガニ・サンギール (Sarangani Sangil) 語 [REID 1971] であるが、この言語では *qi ka'dua* が双称・2数になり、自称・2数は *qi kadi'ni* (*qi ka dua ini* が用いられている。なお、原文では *qi 'kame* が双称・複数に、*qi 'kiteq* が対称・複数になっているが、これはあてちがいであると思う (イリアネン・マノボ語にも双称で単・複のあてちがいがある)。それはさておき、この例では次のように変化したのではないであろうか。



次に少し変わった例としてチャモロ語の場合を述べておこう⁵⁾。チャモロ語では、い

5) チャモロ語は前報では 5Dns 型としたが、8Dns 型と改める。

く組かの人称代名詞があるが、例としては動詞の後におかれる主格の例を示しておく。人称代名詞としては 5Dns 型であるが、動詞に複数を示す接頭辞 (man-) がある。自動詞の例でいえば、図33 (a) に示した人称代名詞の複数に接頭辞 (man-) のついた動詞がつくと複数になる。しかし、もし動詞に man- がつかないときは2数とな

	sg	pl	dl
D		qi 'kiteq	qi 'ka'dua
L	qi 'aq	qi 'kami	qi 'kadi'ni
A	qi 'kaw	qi 'kame	qi 'dua
Ab	qi 'sie	qi 'sle	qi di'dua

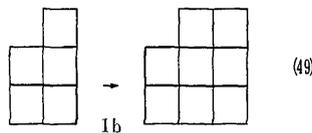
図32 サランガンニ・サンギール (Sarangani Sangil) 語

	sg	pl		sg	pl	dl
D		hit	→		man·hit	hit
L	yo'	ham		yo'	man·ham	ham
A	hao	hamyo		hao	man·hamyo	hamyo
Ab	gue'	siha		gue'	man·siha	siha

(a) (b)

図33 チャモロ (Chamorro) 語

る [TOPPING 1973: 106-111, 232-233]。もともと人称代名詞の複数とみられるものは2数性複数であり、動詞の複数と組み合わせることによって、2数と複数が分離したと考えられる。そうであるなら、この例は



になったと考えられる。

3.3.4. オーストラリア系言語の場合

オーストラリアの言語は 8Dns 型が多かった。これらの言語の内、比較的資料の揃っているダリー (Daly) 語族とパマ・ニュンガン (Paman-Nyungan) 語族とそれに関連する言語について、少し考察してみよう。

まず、ダリー語族のマラックマラック (Malakmalak) 語 [BIRK 1976] は 6Ds 型であるが、双称・単数 yan'ki は、他の言語では双称・2数となっている。さらにマリシエル (Marithiel) 語 [TRYON 1974] では2数形は双称を除いて複数形に -pini が

	sg	pl
D	yaŋki	yeřkit
L	ɟa	yawot
A	waɟari	nukut

マラックマラック(Malakmalak)語

	sg	pl	dl
		ɟaɟkinin	ɟaɟki
	ykin	kati	kati-pini
	nan ^v	nati	nati-pini

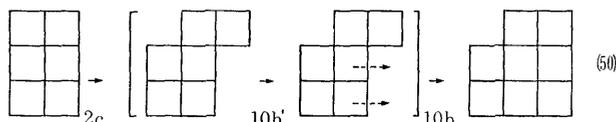
マリシエル(Marithiel)語

	sg	pl	dl
		kaɟkinim	kaɟki
	yin ^v	t ^v er	karti
	nin	ner	narti

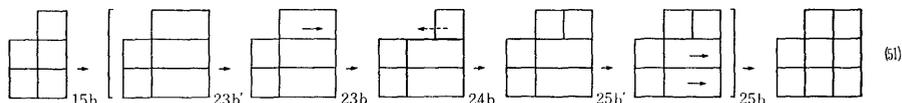
マレンガール(Marengar)語

図34 ダリー語族からの例

ついた形となっている。実はダリー語族のほとんどはマリシエル語と同様の形をとる。この2つを比較すれば、次のような過程でマリシエル語の形が形成されたと考えられる。

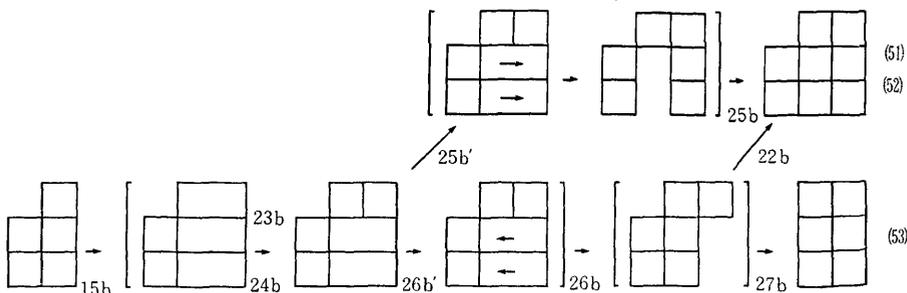


ところが、マレンガール(Marengar)語 [TRYON 1974] では、マリシエル語の双称を除いた複数形が2数形となっている。そして、マレンガール語の複数形は **-er** の接辞した形となっている。これをどのように解釈したらよいであろうか。



マレンガール語では双称・複数単なる複数ではなく、2数性複数であったのであろう。やがて、双称において2数と複数の分離が起る。他の人称と同じように、2つの形をもつようになる。双称を除いた人称では、それにひきずられて、**-er** のついた新しい複数形が形成されて現在の形になった。このとき、初めの2数性複数2数形としてとどまったのである。

マレンガール語の例を考えつつ、マラックマラック語やマリシエル語の場合を統合するように考えると次のようになる。



15b → 24b は同じ過程で進むが、2数性複数は複数として取り扱われ 26b' → 26b となる。そして、2数の接尾辞をその複数形につけて、2数形ができる。マラックマラック語の場合は、26b までは同じであるが、自称や対称に2数形を造らず、むしろ双称・2数の単数性に注目されて 6Ds 型となった。このように考えればダリー語族の発展の過程は一応説明できるであろう。

次にパマ・ニュンガン語族およびそれに関する言語の場合を考えてみよう。パマ(Paman)語については Hale および Sommer [SOMMER 1969] が祖形を再構成している。それを図35に示しておいた。Hale と Sommer とは少し異なる。例えば、Hale は *gali を双称・複数、Sommer は双称・2数としている。しかし、後に述べるようにどちらもそれなりに正しい。この祖形の他に、2数の接辞として bula (dj) および gudjara [WURM 1972a: 63] を考慮に入れて、それぞれの言語の場合を考えてみよう。

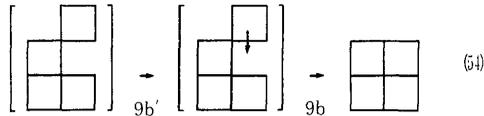
	sg	pl	dl
D		*gampul(a)	*gali
L	*gat ^ʔ a- *gay(a/i/u)	*gana *gañt ^ʔ (i/a)(n)	*nup(a/u)l(a)
A	*n(i/u)nt-(a/i/u)	*ñ(i/u)ra	*ñ(i/u)p(a/u)l(a)
Ab	*n(i/u)lu	*t ^ʔ ana	*pula

図35 プロト・パマ (Proto-Paman) 語の人称代名詞

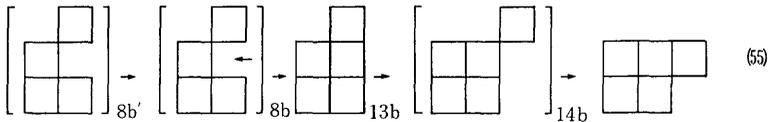
	sg	pl	sg	pl	dl	sg	pl	dl	sg	pl	dl
									D	gatapini	galjini
L	gay-, gada-	gali	gayu	gagdi	gali	gaba	gina	gali	gai	gata	gali
A	wa-, wuda: -, wailu-	gij: man	nundu	nundnida	X	gimba	guda	guba	nini	gutu	mpaja
	ギダバル(Gidabal)語		ヤティン(Yadjn)語			グヌ(Gunu)語 (カカジュマン語族)			カルカトゥング(Kalkatungu)語		
	sg	pl	dl	tr	sg	pl	sg	pl	dl		
D		gari	garendu	garigguri		'garwuri		ganaṇa	njura gali	gali	
L	gaiu	ari	arendu	arigguri	gabi	gali	gajula	gali gudjara baluru gali			
A	nundju	njiri	njirendu	njirigguri	nuji	'nuwuri	njura	njuramuga	njura gudjara		
	ウォロラ(Worora)語(ウォロラ語族)				マウン(Maung)語 (イワイシヤン語族)		グガダ(Gugada)語				

図36 パマ・ニュンガン語族を中心とした例(1)

まず、比較的わかりやすい例から出発しよう。図36に7つの類型を示しておいた。この中で **ɲali* の位置に注目していただきたい。ウォロラ (Worora) 語 [Love 1945-1946] の *nari* < **ɲali* 以外は2数、複数の別はあるが、自称として取り扱われている。しかし、**ɲali* は数を別にして双称と考えられる。そこで、まずギダバル (Gidabal) 語 [GEYTENBEEK 1964] の場合は次のように考えられる。

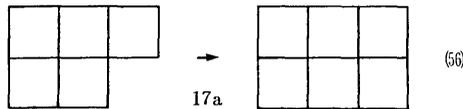


すなわち、**ɲali* はもともと双称・複数であったものが、自称・複数の穴を埋めたものと考えられる。ヤディン (Yadin) 語 [DIXON 1977] の場合は、



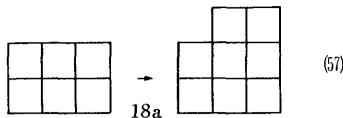
のように、自称・複数に新たに造られた語が入り、一旦は 5Dns 型になる。しかし、双称は2数性複数であり、結果として2数となり、自称・2数に移行して現在の形になる。

グヌ (Gunu) 語 [WURM & HERCUS 1976] の場合は



のようにヤディン語の類型に対称・2数が加わったものである。

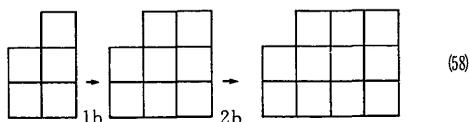
カルカトゥング (Kalkatungu) 語 [BLAKE 1969] の場合は、このグヌ語の類型に、双称の2数・複数に加わったものである。双称・2数および複数是对称・単数と自称の2数・複数とそれぞれ組み合わせられたものである⁶⁾。



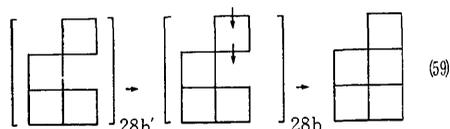
ウォロラ語の場合は、5Dns 型ができるまではヤディン語と同じである。ただし、Forchheimer によれば、自称・複数 *ari* は指示代名詞の複数 (非動物に対する動物の) *ark* と関連していると考えている [FORCHHEIMER 1951: 93]。それはともかく、

6) カルカトゥング語は前報では 11Dns 型としたが、8Dns 型に訂正する。

ウォロラ語は 5Dns 型の基本形がまず形成される。その後それぞれの人称の複数形に 2 数, 3 数の接尾辞がついて 11Dns 型となった。

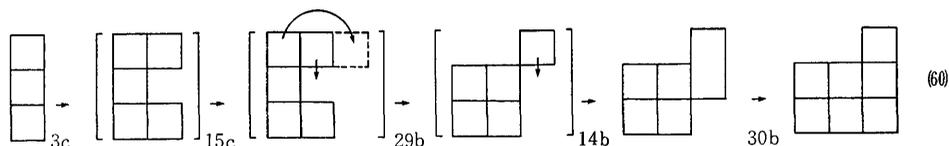


マウン (Maung) 語 [CAPELL & HINCH 1970] の場合は, *ŋali が自称・複数に入っている。一方で, 双称, 対称は複数の接尾辞がみられる。これは次のような過程と考えられる。



すなわち, 双称・複数の *ŋali は自称・複数に用いられるようになる。次に双称・複数が対称と同じ接尾辞をとって形成される。

グガダ (Gugada) 語 [PLATT 1972] を考えるとき, *ŋana を自称・複数とみるか, 双称・複数とみるかによって, 変化の過程が異なる。後の例で示すように, *ŋana を私は双称・複数であり, むしろ, *ŋampul(a) は二次的に発生した双称・複数であると考えている。この場合, グガダ語の発展は次のようである。



数の区別のない人称がまず複数化を起す。しかし自称・複数形成されない。次に自称・複数の穴を双称・複数埋める一方, 双称・単数は双称・2 数へと移される。結果として, ヤディン語と似た過程を経るが, 2 数においては双称の観念はなお残っており, 二次的に双称・対称に 2 数が再生産される。njura ŋali, ŋali gudjara, balura ŋal, njura gudjara などは新しくつくられた語であることは容易に想像できるであろう。

ピチャンチャチャラ (Pitjantjatjara) 語 [TRUDINGER 1943; LOVE 1945-1946] はグヌ語と同じく 6ND 型であるが, *ŋana を自称・複数にもつ点が異なっている(図37)。この言語では, ほとんどグガダ語と同じ過程をたどるが, 最後の段階で異なる。すなわち,

	sg	pl	dl
D			
L	ɟajulu	ɟanana	ɟali
A	njuntu	njura	njupali

ピチャンチャチャラ語
(Pitjantjatjara)

	sg	pl	dl
		ɟana	ɟali, ɟalin
L	ɟayu	ɟanjin	
A	yundu	yurra	yubal

ググ/ヤランジ語
(Gugu-Yalanji)

	sg	pl	dl
		ɟayuni	ɟalku
L	ɟaji	ɟajuru	ɟali
A	yuni	yura	yulku

ンガミニ(Ngamini)語

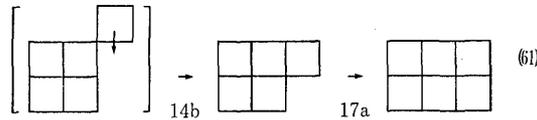
	sg	pl	dl
D		ɟamp	ɟal
L	ɟay	ɟan	
A	nint	niiy	nip

ウィク/ムンカン語
(Wik-Munkan)

	sg	pl	dl
		ɟalima	ɟali
L	ɟara	ɟanabu	ɟalinju
A	nunu	nuruli	numa

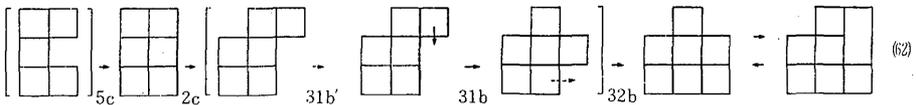
ムルギン(Murugin)語群(ヤナン語の例)

図37 パマ・ニュンガン語族の例 (2)



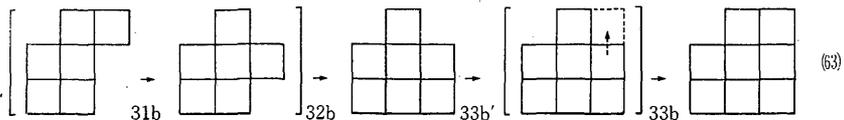
のように、対称に2数形が加わったものである。

ググ/ヤランジ(Gugu-Yalanji)語 [HERSHBERGER 1964; OATES & OATES 1964] の場合は *ɟana が双称・複数として残っている。これは次のようであろう。



一度、6Ds型ができ、双称・単数は2数とみなされる。このとき、双称・2数は自称・2数にも用いられる一方、対称には2数形が出現した。

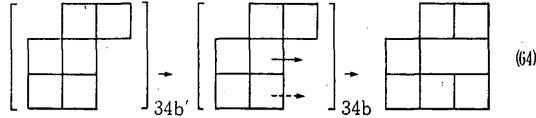
ンガミニ(Ngamini)語 [AUSTIN 1981: 9] の場合は、双称・単数が2数に移るのは同じところである(2c)が、*ɟali は一旦は自称・2数とみなされ、後に双称、対称の2数形が造られる。すなわち、



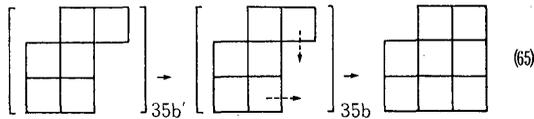
となる。同じ過程を経たと考えられるものに、ヤルルヤンディ(Yarluyandi)語やデ

イヤリ (Diyari) 語, ヤワラワルガ (Yawarawarga) 語, ヤンドゥルワンダハ (Yandruwandha) 語など [AUSTIN 1981: 9] がある⁷⁾。

ウィク/ムンカン (Wik-Munkan) 語 [GODFREY 1964; GODFREY & KERR 1964] では,



同じ過程で対称・2数は形成されるが自称・2数は形成されずかわりに自称・複数がその穴を埋めたものとも考えられる。同様にムルギン (Murngin) 語群 [CAPELL 1942-1943: 40-42] では, 最後の段階で自称・対称にも2数形が形成されたとみることができる。すなわち, 次のようである。



ところが, 次のガラワ (Garawa) 語やアニュラ (Anyula) 語をみると別の過程が考えられる。しかも, それはかなり複雑な過程である。

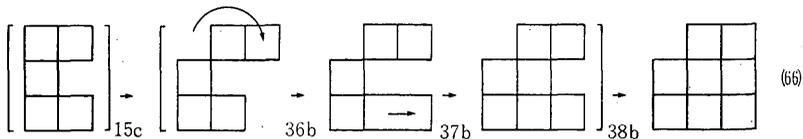
ガラワ語 [FURBY 1972], アニュラ語 [CAPELL 1941-1942; KIRTON 1964, 1971] では, 双称・複数が対称・2数と同様に, **-mbala** < ***bula** という2数の接辞をもっている点が重要である。

	sg	pl	dl	sg	pl	dl
D		ɟambala	nungala	ɟampala	ɟali	
L	ɟayu	nuɾu	ɟali	ɟarna	ɟanu	ɟatharra
A	ninjɟi	nari	nimbala	yenta	yirru	yimpala

ガラワ (Garawa) 語(ガラワ語族) アニュラ (Anyula) 語(アニュラ語族)

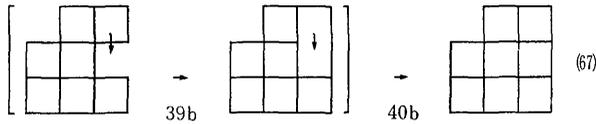
図38 ガラワ語とアニュラ語

ウィク/ムンカン語では双称・複数/他称・2数は **ɟamp/nip** であり, ガラワ語ではそれらと同系の語に2数の ***bula** が接辞した形と考えられ, 同様にムルギン語群においても **-ma** が規則的に双方にみられる。この点に着目すると異なった過程を考えなければならない。アニュラ語とムルギン語群とは ***ɟali** が双称・2数にある点で同じであり, この場合を考えてみよう。

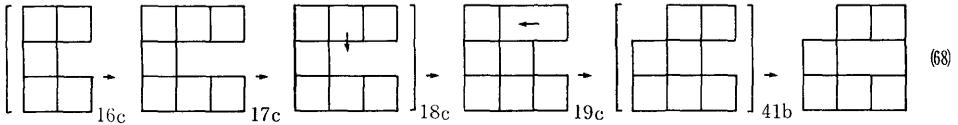


7) ディヤリ語以外に, 本文中に記したように, ンガミニ語, ヤルルヤンディ語, ヤワラワルガ語, ヤンドゥルマンダハ語の4語を, I. 3. 20の [South] の項に 8Dns 型と追加しておく。

まず、複数化は **-*bula** が付加することによって起る。この複数は2数性複数であったのであろう。やがてそれは2数性複数から複数になる一方、双称・単数 ***ɲali** は双称・2数性複数になる。そのとき、対称の2数性複数はそのままで残る。次に、対称の2数性複数は2数になる一方、新たな複数が加わり、同時に自称にも複数が加わる。最後に自称・2数ができて現在の形となる。ガラワ語の場合はこの最後の段階が異なる。双称・2数 ***ɲali** は自称・2数にもつかわれ、一度は自称の穴を埋めるが、後にむしろ自称・2数的に多く使われ、新たな双称・2数が形成される。



ウィク/ムンカン語の自称・複数が **ɲan<*ɲana** である点が説明を難しくしている。しかし、これは次のようではないであろうか。



3c でできた形のままでさらに2数化が進む。その後、双称・複数が自称・複数につかわれ、その穴を双称・2数が複数化して用いられた。さらに双称・2数の穴を双称・単数が埋める。一方、自称・複数はそのままの形で2数にも用いられるようになって現在の形になった。

今までの分析は主として ***ɲali** を中心にすえての分析である。しかし、次に述べる言語には ***ɲali** がみられない。だが **-*bula** とみられる接尾辞をもつものは、先に述べた例で理解できる。

	sg	pl	dl		sg	pl	dl
D		ampul	aliy			lapal	lata
L	ay	anjtan	alnj		ya	lada	lala
A	inang	urr	upal		tuy	ro	poi
クンニェン(Kunjen)語				ラマラマ(Lamalama)語			
	sg	pl	dl		sg	pl	dl
L	nai	nalpula	nalpu		jina	nuna	ilina
A	nhma	nhura	X		unta	rankara	mbala
アドゥニャマタンハ語 (Adnjamathanha)				アラング語 (Aranda)			

図39 パマ・ニェンガン語族の例(3)

べた例で理解できる。クンニェン (Kunjen) 語 [SOMMER & SOMMER 1967] やラマラマ (Lamalama) 語 [LAYCOCK 1969] は、アニユラ語と同じ過程 (66) とみてよいであろう。アドゥニャマタンハ (Adnjamathanha) 語 [SCHEBECK 1973] はピチャンチャチャラ語と同じ過程 (61) とみてよい。し

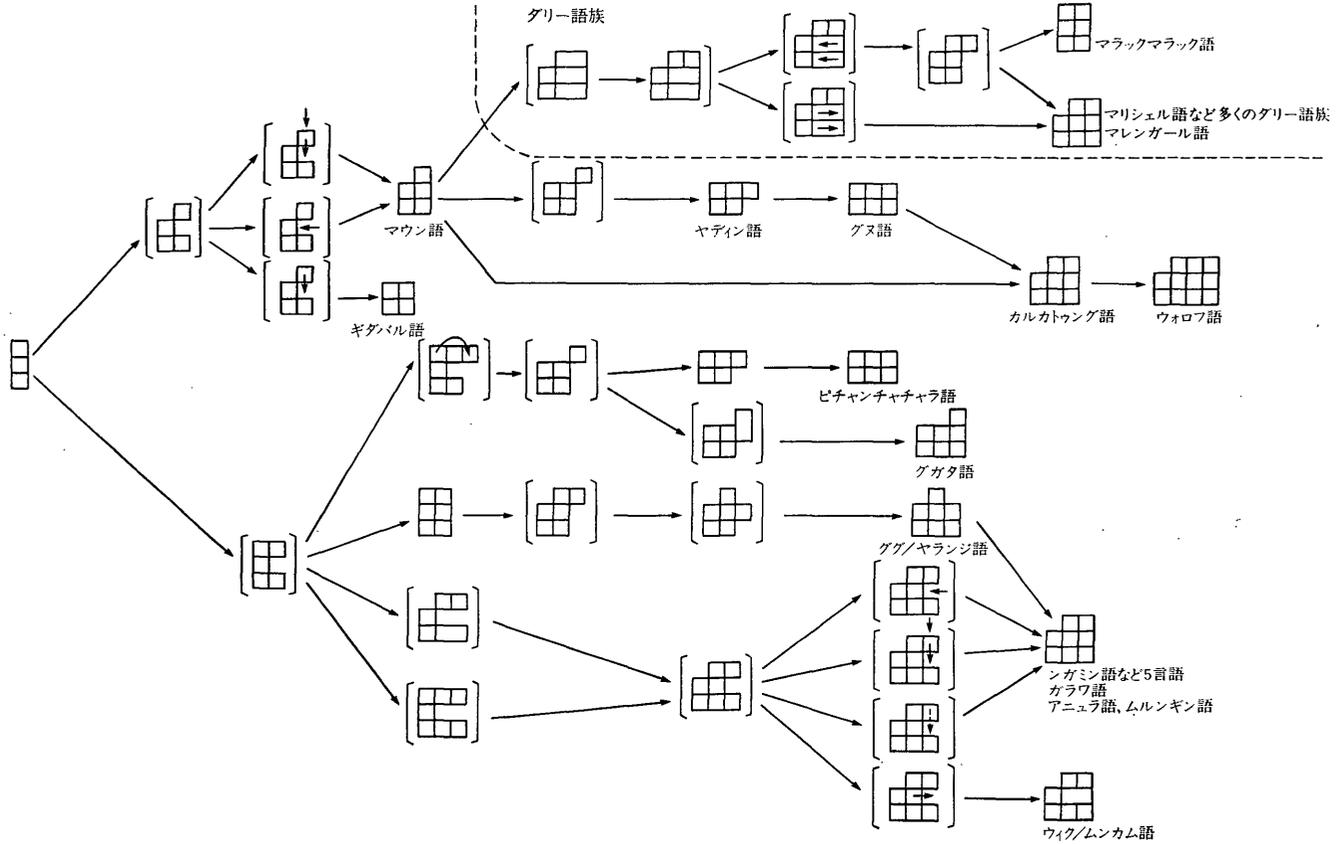


図40 オーストラリア系言語の種類の発達のみとめ

かし、アランダ (Aranda) 語 [STREHLOW 1942-1943] では分析の手がかりとなるものがひとつもない。そのため、この過程は不明である。そして、アランダ語のような例も少なくはない。

ここで述べた過程は、勿論直接的な証拠はない推測である。やや苦しい説明もないわけではないが、全体としてみればおおよそ説明できたのではないであろうか。

オーストラリアの言語について、これまで述べてきたことをひとつにまとめて図示すると図40のようである。この図にみられるように、非常に複雑な過程を経て、現在の 8Dns 型が形成されている。

3.3.5. 9Ds 型について

この項の最後に 9Ds 型をみてみよう。すでにンゲンバ語については「発達した合成形」の項で述べたので、他の2つについて述べておこう。まず、ひとつはメラネシア語群の言語に囲まれたパプア系言語のリーフ (Reefs) 語 [WURM 1969, 1972b, 1976] の場合である。サンタ・クルスの近縁関係にある言語はいずれも 6Ds 型であ

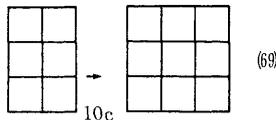
	主格接尾辞			sg	pl
	sg	pl	dl		
D	-d ^y i	-de	-dele	-ki	-ku
L	-no	-go	-gole	-ä	-kö
A	-mu	-mi	-mile	-ü	-am
Ab	-gu	-gui	-guile	-u, -le	-lö, -nú

リーフ(Reefs)語 マロ(Malo)語

図41 リーフ語とマロ語

る。リーフ語とその中のひとつマロ (Malo) 語 [WURM 1969, 1972b, 1976] を図41に示しておいた。マロ語などの 6Ds 型の語彙素を分析してどのような過程で 6Ds 型になったのかを考えるのはかなり難しい。しかし、リーフ語に2数形ができる過程はすぐに読みとれる。すなわ

ち、-le を接辞すればよい。-le は2数の接辞なのであろう。このとき双称・2数というのは「あなたとわたしにもう1人だけか」という意味になる。メラネシア語群に囲まれ、外からのインパクトでこういう形が出現したのであろう。リーフ語の場合は次のような過程と考えるとよい。



次にオーストラリア系言語のブレラ (Burerá) 語 [GLASGOW 1964] の場合をみてみよう (図42)。人称代名詞としては双称と自称に複数・2数の区別はない。しかし、双称・自称のこれらの区別は動詞の接辞によって区別される。例えば、2数の場

合は次のようである。

ɲatippa adi-poy : 私とあなたと3人はゆきます。

ɲatippa nyidi-poy : 私達2人はゆきます。

複数の場合なら、双称には *nupuda-*、自称には *nyuwunda-* が動詞に接辞しこれらの区別がなされる。このように動詞の接辞と組み合わされることによって 9Ds 型となる。動詞で数を区別する例はあったが、これは人称を区別する例である。ただし、Capell のあげる 8Dns 型の例 [CAPELL 1942-1943: 375] とは異なっており、この Glasgow の例と比べることはできず、ブレラ語がどのような過程でこの類型になったかは不明である。

さて、以上述べてきた発展の様式を、さまざまに書き入れていた「遷移型」を簡素化して、ひとつの図にまとめたものが図43である。

	sg	pl	dl
D	ɲadeppa	ɲaypudeppa	ɲatippa
L	ɲayppa		
A	ɲinyippa	anakoypudippa	ana-kotippa
Ab	nippa	pudippa	putippa

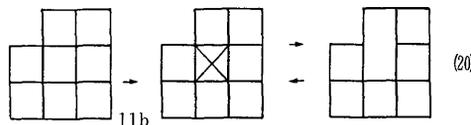
図42 ブレラ (Burera) 語 (nominative)

本報で利用できた資料はそれほど多くないことを考えると、実際に起ったであろう発達の様式はもっと複雑であったろうと思われる。この図を基本的類型と 4Dns 型、5Ds 型の2つの重要な「遷移型」を加えて再整理した図が図2である。

4. 類型退化の様式

これまで、発展の様式について述べてきたが、類型が退化することもある。すなわち、ある類型から類型を成立させていた語彙素が減少して他の類型に変化することがある。発達だけでなく、この退化の現象をも検討しておかなければ片手落ちであろう。ただし、以下にみられるように、はっきりとそれとわかる例はあまり多くはない。

さて、前項ですでにいくつかの退化の例を述べてきたが、それをまずまとめておこう。例えば低地カヌアリ語は次のような退化がみられた。



また、シヨシヨニ語の変化する過程の中で、次のようなものがあった。

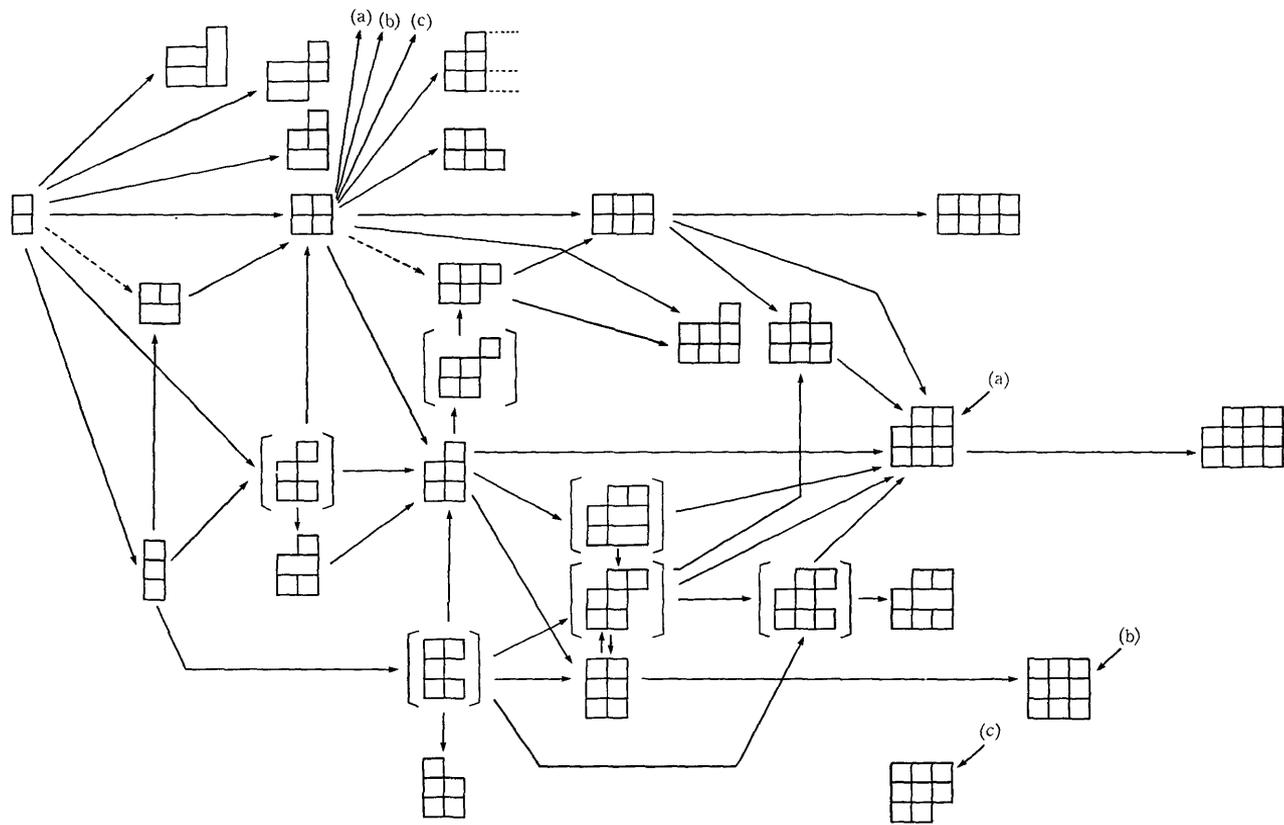
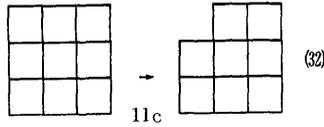
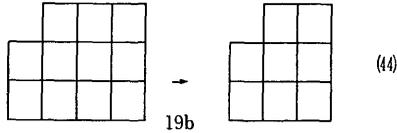


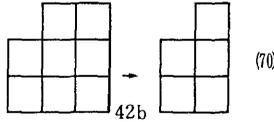
図43 簡素化した発達の様式のまとめ



そして、オーストロネシア語族ではポリネシアに多くみられる退化として、



の図式があることをみた。先には述べなかったが、マイクロネシアやメラネシアに5Dns型が多くみられ、これらの内のいくつかは8Dns型、あるいは11Dns型から退化したのも含まれていると思われる。すなわち、



というような退化も想定できると思う。

次にこれまでに検討しなかった退化の例をみてゆこう。ただし、退化してきたのか、発達の過程にあるのか明確でないものも多く、それらは割愛されている。

4.1. 非双称型の退化

まず、よく知られた英語を取り上げてみよう。Old English には明らかに2数形が存在した。自称・2数 wit は *we-dwo>*we-tu>*witu>wit となったと考えられ [PROKOSCH 1939: 284-285], 単・複が形成された後に2数形が出現したのであろう。しかし、後に2数形は脱落し4ND型となる。このような過程は多くのインド・ヨーロッパ語族にみられるが、

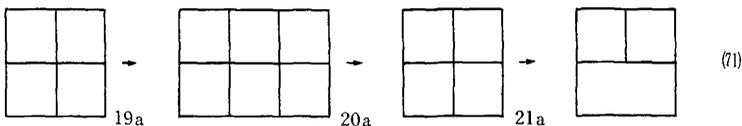
英語のみは、対称・単数 thou は親密な間だけで用いられる人称代名詞となり、一方で丁寧なその単数形である対称・複数にとってか

	sg	pl	dl	sg	pl	sg	pl
L	ic	wē	wit	I	we	I	we
A	pu	gē	git	thou	you	you	

Old English

図44 英語の人称代名詞の変化

わられる。そのため現在のような形となった。この例を図化すると次のようである。



	sg	pl	sg	pl	sg	pl
L	ni	gu	ni	gu	ni	gu
A	hi	zu	(hi)	zu	zu	zuek

図45 バスク(Basque)語の人称代名詞の変化

バスク語 [下宮 1979: 260-261]

の場合は、英語と同じように対称・単数は親称として用いられ、対称・複数は敬称として単数としても用いられるようになり、ついにはもとの

対称・単数は脱落してしまう。ここで止まっていれば英語と同じような形となるが、新たに対称・複数が造られ、もとの4ND型に戻っている。同じようなケースはトルコ語やベンガル語にもみられるという [HEAD 1978: 161]。

親称・敬称という区別による類型の変化は退化の様式におけるひとつの動因である。勿論、親称が消えることによって類型が変化するのであるが、親称・敬称が並立する場合の方がむしろ多い。しかも、このような現象は世界各地で広く認められるものである。

親称・敬称の区別が派生してくる様式にはいくつかの種類がある。英語やバスク語にみたような、対称・単数が親称になり、対称・複数が対称・単数の敬称となるケースが最も頻度の高いものである。複数形が単数として用いられる例は他称や自称においてもみられる。ただし、ここでは他称を取り扱わないので自称の場合を考えてみよう。この場合、複数形はただちに丁寧な表現となるわけではない。英語では高い社会的位置を占める人が、weを用いることがあるが、これは決して謙譲ではなく、むしろ聞き手からの距離を保つためであり、“royal we”と呼ばれる [HEAD 1978: 164]。日本語にみられる“わたしら”という謙譲の表現とは異なるものである。こうした尊厳あるいは謙譲の例は、日本やヨーロッパだけでなく、世界各地でみられる。Head はインド・ヨーロッパ語族以外でも18例をあげている。しかし、本報との関係でいえば、いずれの場合も並行するだけで、完全にとってかわるまでにはなっていない。むしろ並立することによってこれらの機能が生きるのではないかとさえ思われる。

これまでは単数のみの例を述べてきたが、2数形が単数として用いられることもある。たとえばナバホ(Navaho)語やモタ(Mota)語、ティコピア(Tikopia)語では対称の2数形が単数として用いられている [HEAD 1978: 158]。しかし、いずれの例においても完全におきかえることなく併存している。類型が変わるのは対称の複数が単数におきかわるだけであった。なお、念のために付け加えれば、非単数が丁寧さを表すために単数として用いられることはありえるが、この逆はまずないといってよいであろう。このことは、双称型でも取り上げなおすことになる。

さて、Old English の 2 数形が脱落するのは一種の単純化といえよう。ただし、このような単純化の理由は使用頻度と相関するのかもしれないが、今ひとつ明確ではない。しかし、単・複という数は基本的なものであり、非双称型では一般に 2 数に関係してしか脱落は起らない。ただし、英語のように 2 数形が完全になくなってしまうと、かつて使っていたという記録のないかぎり脱落したかどうかはわからない。

対称の 2 数が脱落したと考えられるものがみられる。アリュート (Aleut) 語は対称・2 数が脱落しつつあると考えられる [BERGSLAND & DIRKS n.d.]。ただし、アリュート語に自称・2 数がもともとあったかどうかは不明である。アラビア語のコロキユアルなモロッコ [HARRELL 1962] やエジプト [KHALAFALLAH 1969]、イラク [ERWIN 1963] などの方言では、対称・2 数を欠いている。これも脱落した例であろう。



4.2. 双称型の退化

次に双称をもつ場合を考えてみよう。トバ・バタック (Toba-Batak) 語 [VAN DER TUUK 1971: 216-220] を例としてとりあげてみると、人称代名詞の基本形は図46

のようである。対称・単数の敬称として対称の複数が用いられるのは先にみた通りである。他称においても同様であり複数が他称・単数の敬称として用いられる。ところが、自称・単数についてはやや異なり、双称・複数が用いられる。謙譲と考えてよいであろう。ところが、双称・複数は対称・

	sg	pl
D		hita
L	au	hami
A	ho	hamu, hamuna
Ab	ibana	nasida

図46 トバ・バタック (Toba Batak) 語の基本形

単数にも用いられる。対称・単数は親称として親しい間以外では用いられない。それ故、相手とどういう関係にあるかが不明のときは対称・単数および複数が使われない。このとき、双称・複数が用いられる。そして、相手が明らかに自分より上にある場合は対称・複数が用いられる。これらから判断すると、丁寧さの強さは対称においては対称・複数 > 双称・複数 > 対称・単数ということになる。

さて、双称が他の人称に用いられる例をトバ・バタック語以外に探してみると、双称・複数が自称・単数に用いられる例はカロ・バタック (Karo-Batak) 語にもみられ

るし、マレー語にもみられる [HAAKSMA 1933]。特にアンボン・マレー (Ambon Malay) 語やミナハサ・マレー (Minahasan Malay) 語では双称・複数が自称・単数にとって代わっている。ただし、ミナハサ・マレー語では双称・複数が新たに造られている。双称形 *kita torang* は自称・単数 *kita* と自称・複数 *torang* との組み合わせによって再生されている⁸⁾。アンボン・マレー語ではこの点を確認していない。

次に双称・複数が他称・単数になるという例を探してみると、ミナンカバウ (Minangkabau) 語、古ジャワ語、マカッサル (Makasar) 語、ブギス (Bugis) 語、サダン・トラジャ (Sa'dan Toraja) 語、ロイナム (Loinam) 語、ビマ (Bima) 語などにみられる。古ジャワ語やビマ語では、双称・複数を対称・複数にも用いているが、どのような丁寧さを表現するのかわかり不明である⁹⁾。なお、自称・複数が自称・単数のかわりに用いられることもある。マレー語や古ジャワ語にはそうした例がみられる [HAAKSMA 1933]。

以上に述べたような例は、マレー語の方言を除いて併存するものであった。ところが、Cowan [1953] によると西イリアンには、双称・複数と自称・単数が同じ形である例がいくつかみられる。その内、マンティオン (Mantion) 語の場合は、上に述べたように双称・複数が自称・単数になった例としてもよいが、他の例はどうやら自称・単数が双称・複数に使われているケースのようである。例えばウィンデシー (Windesi) 語の方言であるビントゥニ (Bintuni) 語では、ウィンデシー語と比較してみると、自称・単数が双称・複数に用いられているようにみえる。このような例はカウィット (Kawit) 語、バンロール (Banlol) 語、バタンタ (Batanta) 語にもみられる。これについて、Cowan は次のように説明している。すなわち、双称・複数は“尊厳の複数”であり、それ故に放棄された [Cowan 1953: 23] と。しかし、この説明には少し無理があると思う。“尊厳の複数”ならばむしろ自称・複数を用いるべきでは

	sg	pl	sg	pl	sg	pl
D		jäu		tan		tâni
L	jäu	täpaubé	jäu	amat	tâni	hõmo hõmo
A	au	miâte	au	mia(t)	bãni	jèni

ビントゥニ(Bintuni)語 ウィンデシー(Windesi)語 マンティオン(Mantion)語

図47 西イリアンからの例

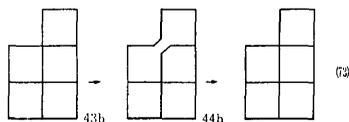
8) *torang* は **kita orang* > *kitorang* と関係があるかもしれない (崎山氏からのパーソナル・コミュニケーション)。

9) 古マレー語や古ジャワ語では、自然力や神性を対称として指し示すとき、*kita* が用いられていた (崎山氏からのパーソナル・コミュニケーション)。

ないであろうか。尊厳を保つためには聞き手との距離をとらぬばならない。Head のように“尊厳の複数”あるいは“royal we”というのは自称・複数的(一人称排除的)な意味で用いられている [HEAD 1978: 164-165]。さらにそれを認めるとしても、何故自称・単数が双称・複数に用いられるのであろうか。この説明は先の判断よりもかなり難しいと思う¹⁰⁾。むしろ自称・複数が双称・複数にも用いられるというのならかなりわかりやすいのであるが。ただし、例外もありうることであり、Cowan のこの資料には疑問をなげかけ、本論から除いておこうと思う。

他にわずかに知られている例を書き出しておこう。ハワイ語では、双称・2数が対称・単数の敬称として用いられることがある。またアウカ(Auca)語では自称・複数、および2数が対称・単数の敬称として用いられている [HEAD 1978: 178]。

以上の例の内では本論に関わる部分のみを取り出すと、次の2例だけである。



次に双称型の脱落の例をみてみよう。まず、エンガノ(Enggano)語では、自称・複数が脱落したと考えられる [HAAKSMA 1933: 47]。これは話し手は1人以外にはないという考え方が支配して、このような結果になったのかもしれない。ヌホール(Nufoor)語でも自称・複数が脱落しているが、2数は残っている。Haaksmaによれば自称・2数は二次的に派生したものとみている [HAAKSMA 1933: 172-173]。

	sg	pl	sg	pl	dl
D		ika, ka		inko, ko	ku
L	ua, uē	X	aya, ya		nu
A	oō, öö	oō, öö aru, ariu	au, awe, wa	imgo, mgo	mu

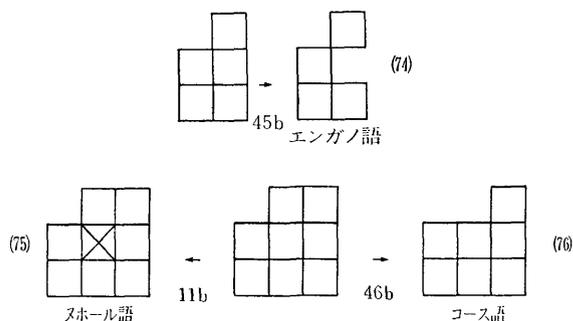
エンガノ(Enggano)語

ヌホール(Nufoor)語

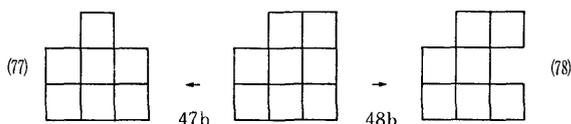
図48 エンガノ語とヌホール語

恐らくエンガノ語と同様の考え方が支配して自称の複数だけでなく2数も一度は脱落し、そのうち2数のみが復活したと思われる。アメリカのコース(Coos)語の場合は、理由は不明であるが、双称の複数が脱落している [FRACHTENBERG 1922: 321]。これらをまとめると次のようである。

10) 西イリアンでのマレー語方言には、アンボン・マレー語とよく似たものがあり、双称・複数 kita は自称・単数に変わっている。一方で標準インドネシア語での kita は双称・複数であり、近年になって標準インドネシア語が強くなっている。この地の人々にとっては、kita が双称・複数と自称・単数と使い得ると考え、自己の言語においても、自称・単数を双称・複数に使うようになったのかもしれない。



メラネシアには双称・2数の脱落したものがみられる。シネシップ (Sinesip) 語 [RAY 1926: 303] やクリビウ (Kuliviu) 語 [RAY 1926: 267] がその例である。自称・2数が脱落したものにはセラム島のウヘイ・カチャラキム (Uhei-Kachlakim) 語 [HAAKSMA 1933: 162], オーストラリアのマンガライ (Mangarai) 語 [CAPELL 1940: 409] がある。これらは次のように図化される。



オーストラリアのガラマ (Garama) 語の場合は双称・複数および3数が脱落し、

	sg	pl	dl
D		nigcint	
L	kinagk	camem	rumem
A	nunk	nigcim	ruum
Ab	ei	ar	ruar

シネシップ(Sinesip)語

D		gian-	gija-
L	ga-	gilan-	
A	nja-	la-	nura-
Ab	na-	wian-	wuran-

マンガライ(Mangarai)語

図49 シネシップ語とマンガライ語

2数だけが残っている。ただし、この3数というのは正確に3人を指すのではなく、少数を指す [CAPELL 1940: 419]。

メラネシアのパーマ (Paama) 語では3数に脱落がみられる。双称と対称に3数はなく、自称と他称に3数が残っている [RAY 1926: 317]。ボルネオのブサン (Busang) 語の場合はもう少し複雑である。自称では3数まで残っているが双称と対称では2数・3数が共に消えている。しかし、

	sg	pl	dl	tr(limited)
D			negi	ganguneme
L	gai	gangu	ganguninda	
A	njinji	nangu	nanguninda	nanguneme

図50 ガラマ (Garama) 語

	sg	pl	dl	tr
D		ire	ialu	/
L	inau	komai	komalu	komaitelu
A	keiko	kamı	kamelu	/
Ab	keiye	ceile	ceilu, ceiluo	keitelu

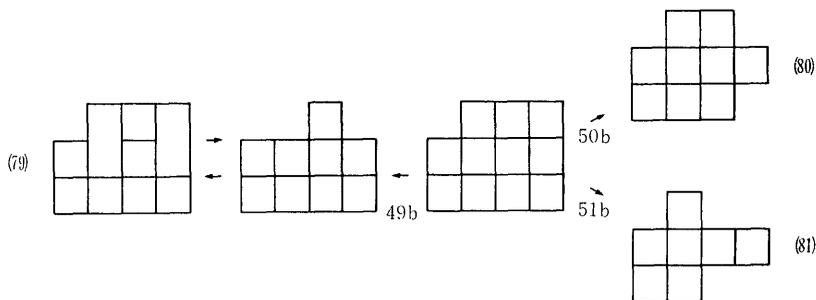
パーマ(Paama)語

	sg	pl	dl	tr
		ita, ita, tëlq	X	X
akui	kameḡ	kawaḡ, kuḡ	kemtëlq, këmëlq	
ika	pëlq	X	X	

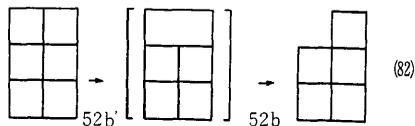
ブサン(Busang)語

図51 パーマ語とブサン語

双称・複数の中に **tëlq** という語が見えるが、**tëlq** というのは「3」という意味であり、もともと3数であったものであろう。対称の **pëlq** は *mu+tëlq>*mulo>pëlq となったものであり、もともとの複数形が消えて3数形が複数となっている [HAAKSMA 1933: 65-66]。これらは次のように図化される。



最後に **6Ds** 型についてみてみよう。タガログ語では文化変容が進行しており、双称・単数は用いられなくなってきている。特にマニラのタガログ語は双称・単数は使われない [SCHACHTER 1972: 89]。この過程は次のようである。



イリアネン・マノボ語 [BRICHOUX & BRICHOUX 1977] では双称・単数は実は2数性複数である。特別に2人以上であることを示すときにのみ双称・複数が用いられる。それ以外のあいまいな複数は双称・単数で示される。このことは、両方に解釈が可能である。すなわち、双称・複数が特殊な複数を目指すものとして出現し、双称・単数がなお複数性を捨てていない状態なのか、あるいは、双称・単数が複数性をもち、逆に双称・複数が限定された複数しか指さないのかどちらかである。このように2数

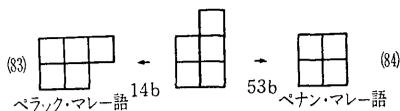
性複数あるいは3数性複数，少数的複数などのみられる例は，ある類型から他の類型へ移る過渡的なものが多いようである。イリアネン・マノボ語の場合，恐らくは双称・複数が消えるのではないかと思われる。フィリピンの言語にも5Dns型が多くみられるが，その内のいくつかは，(82)のような過程を経て，5Dns型になったのではないだろうか。そしてイリアネン・マノボ語もその道をたどるように私には思える。

	sg	pl	dl		sg	pl
D	aku	akuma	kita		saya	sepa
A	muka	mikama			hañ	hañpa
	ペラック・マレー (Perak Malay)語				ペナン・マレー (Penang Malay)語	

図52 マレー語の変異

最後にマレー語の変異について少し述べておこう。ペラック・マレー(Perak Malay)語では，オーストロネシア語族に共通してみられる複数形を失い，かわって **-ma** という複数を示す接尾辞がついている。そして

双称は自称の2数として残っている¹¹⁾。ペナン・マレー(Penang Malay)語では双称は失われ，一方自称も ***aku** にかわって **saya** が用いられるようになり，その **saya** に **-pa** という複数の接尾辞がついている [HAAKUMA, 1933: 23]。このように，リング・フランカである言語では単純化するものであり，形態的複数へと移行している。これらは結果として次のようになるであろう。



4.3. 退化の様式のみとめ

以上に述べた退化の例をまとめたものが図53である。実際にはさらに多くの派生的類型がこの中に書き込まれるはずであるが，退化したというよりは情報不足のため不明というものが多く，それらはこの範囲に含まれていない。また，比較する材料がなく，この中に含まれていない派生的類型もある。

退化の機構はあまり明確でない。2数や3数における退化は実際の使用頻度が減少し，それらが脱落したと考えられる。それは，「明確」な指示から「あいまい」な指示への変化ともいえるが，人間の言葉の使用あるいは認識にはどちらの方向にも向かう「振れ」があるように思われる。

親称・敬称の出現は，語彙素を変える，あるいは豊かにする点では重要であるが，類型の変化としてはそれほど重要ではない。ただし，人称や数の増加による指示の明

11) ペラック・マレー語は前報で4ND型としたが，5ND-A型と訂正する。

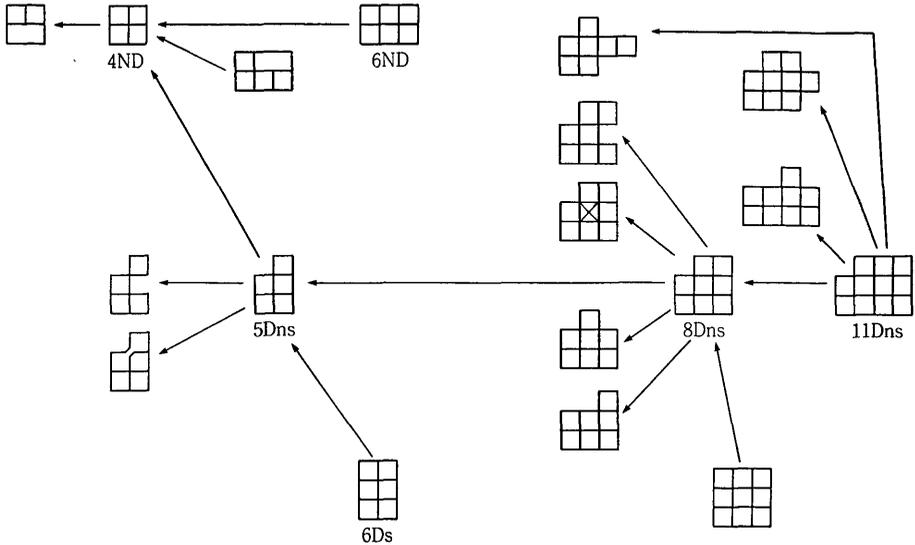


図53 退化の様式のみまとめ

確さに向かう方向だけでなく、人々のさまざまな社会関係を明確にする、あるいは、さまざまに微妙に使い分けできる語彙素の増加という方向もひとつの重要な発達の様式として認めておかなければならないであろう。日本語だけではなく、タイ語やベトナム語、インドネシア語においても、話し手や聞き手、その場にいない人の指示に多くの語彙素がみられ、使い分けられている。これらは、このような方向に向かったひとつのグループとみてよい。そして、それは一般に社会の発達の度合に応じて語彙素が増加すると考えられる。しかし、ここでも揺れ戻しがみられ、ある種の簡素化が一方で進行している。

外からのインパクトによる変化もひとつの機構であろう。特に類型の異なる言語が接触したとき、有力な言語にひきずられるということは往々にしてみられることである。勿論、これは増加にも減少にも作用する。そして、マニラのタガログ語の例は退化の典型的な例であろう。

現在の状況のみをみると、人称と数における発展は限界にきているように思える。特に、どの地域も孤立した状態のままでもどまるわけにはいかない。外からのインパクトが加わり、徐々に変化していくことであろう。そのとき、類型としては簡素な言語が強く影響する構造になっている。それは単に英語などのヨーロッパ系の言語の影響だけでなく、インドネシアではインドネシア語が、タイではタイ語が強く作用するというような場合も想定してのことである。そして、恐らく、もっとも出現頻度の高

かった4ND型や5Dns型に今後集中してくる可能性は極めて高い。現在は、類型の簡素化が進行している時代のようなのである。しかし、全てがそのようになるとは到底思えないし、長い目でみれば再び揺れ戻しがくるのかもしれない。

5. おわりに

本報の目的は、会話場面における人の認識の類型の発達の様式を明らかにすることであった。それは、語彙素の形態に着目して行なったものであるが、当然のことながら、形態の変化の様式ではなく、その裏側にある認識の発達の様式に焦点があわされてある。

その結果は第2章にまとめてあるため、ここで繰り返すことは避けるが、その発達の動因については繰り返し述べておこう。すなわち、発達の主動因は人称と数で構成されたシステムに内蔵されている。そのため、生態学的環境や人間の生理学的レベルなどの現象とも相関せず、ほとんど純粋な形で人間の認識の発達の様式を提示することができた。

私はこれまで人称代名詞の類型的変化を認識の発達の様式として取り扱ってきた。この現象を、勿論、認識の変形 (transform) とみることでもできる。そのときは発達とも退化ともいう必要はない。ある類型から他の類型に認識が変形されるというだけでよい。そして、その変形の様式と動因を明らかにしたということができる。

しかし、第1報あるいは本報の退化の項で述べたように、私はこの現象を一種の変動とみている。認識というものは、拡散したり収束したりする。派生的類型と基本的類型との関係においてその関係を認めただけでなく、基本的類型間においてもそれを認めたということである。基本的類型間においてもあるときは拡散し、あるときは収束する。それを発達といい、退化と表現してきた。そして、特に自称や対称、双称の発生に関しては、発達という語を強い意味で用いている。そこでは明らかに進化的な背景を基にしている。異なった背景を基にしながら、「発達」という語を本報では用いてきたのである。

また、ここまで議論を重ねてきたとき、双称のもつ意味を今少し深く議論したいという気持ちを常にもっていた。しかし、ついに本報においてそれを果たすことはできなかった。別の機会で、この問題を改めて考えてみたいと思っている。

本報にも問題がないわけではない。世界各地に散在する資料をあやうい言語学的手法を用いて分析し、さらに、多くの場合は推論に推論を重ねて得た結論である。ただし、このような類型の発達の復元を図るにはもとよりこのような方法しかなく、そし

私にはこの程度の分析しかできなかった。よりふさわしい研究者によって再考されるならばこれにこしたことはない。

さて、連続する3報を通じて、次のことを明らかにしたことになる。双称を含めた人称代名詞の体系の妥当性を第1報で述べ、第2報で「会話場面における人の概念」の類型化を世界的規模で行ない、双称をもつものが、約半分を占めること(インド・ヨーロッパ語族は残り半分の双称をもたないものの1つのグループであるにすぎない)、また言語グループと類型が相関していること、双称の基本的な概念の発生には少なくとも3つの起源があることなどを提示した。そして、この第3報では、その類型の発達の様式とその機構・動因を明らかにした。これらによって、初期の目的としてきた「ある意味領域における、人類における認識の変異とその発達の様式を明らかにする」ことは達成されたのではないかと思っている。そして私の興味は、こうしたエティックな立場から再びイーミックな立場へと移行しつつある。より具体的な、より精緻な、より動的な分析へと回帰しつつある。それはエティックな研究とイーミックな研究は相補的なものであり、そのどちらを欠いても私は不充分だと考えているからである。どちらかといえばイーミックな研究に熱中しがちな私達にとっては、エティックな研究あるいはその見方を私はいつも保持していいたいと思っている。

最後に、多くの資料を大急ぎで処理したため、あちこちに誤りがあると思う。本報を書く間にもそうした誤りをいくつか見出し出している¹²⁾。そうした誤りによっても、これまで述べた基本的な構成については、ほとんど変化ないと私は思っているが、あるいはそうではないかもしれない。誤りがあれば是非とも御教示願いたいと思っている。

文 献

ALLAN, Edward J.

1976 Dizi. In Marvin Lionel Bender (ed.), *the Non-Semitic Languages of Ethiopia*, East Lansing, African studies Center, Michigan State University, pp. 377-392.

ARNOTT, D. W.

1970 1st and 2nd Person Pronominal Forms in Fula. *African Language Studies* 11: 35-47.

AUSTING, John & Randolph UPIA

1975 Highlights of Ömie Morphology. In T. E. Button (ed.), *Studies in Languages of*

12) すでに脚注で記した以外に訂正するものを列挙しておく。

* Mosana (I.1.3.2. West Irian) 6Dns-0-L → (I.2.2. West Papuan) 4ND

* Uhei-kachlakim → Uhei-kachlakim

* Kamoro 5ND-L → 6ND

* Nyulryul 6Dns-du-A → 6Ds

* Eskimo 6ND → 4ND

* Ojiwa → Ojibwa

Central and South East-Papua, Pacific Linguistics C-29, Canberra, the Australian National University, pp. 513-598.

- AUSTIN, Peter
 1981 *A Grammar of Diyari, South Australia*. Cambridge, Cambridge University Press.
- BAILEY, T. Grahame
 1975 (1915) *Linguistic Studies from the Himalayas*. New Delhi, Asian Publication Services.
- BAUMAN, James John
 1975 *Pronouns and Pronominal Morphology in Tibeto-Burman*. Unpublished Ph.D. Dissertation Paper of University of California, Berkeley.
- BENDER, Byron W.
 1969 *Spoken Marshallese: An Intensive Language Course with Grammatical Notes and Glossary*. Honolulu, University of Hawaii Press.
- BENTON, Richard Anthony
 1971 *Pangasian Reference Grammar*. Honolulu, University of Hawaii Press.
- BERGSLAND, Knut & Moses DIRKS
 n.d. *Introduction to Atkan Aleut Grammar and Lexicon*. n.p., University of Alaska.
- BERLIN, Brent
 1963 A Possible Paradigmatic Structure for Tzeltal Pronominals. *Anthropological Linguistics* 5(2): 1-5.
- BERLIN, Brent & Paul KAY
 1969 *Basic Color Terms*. Berkeley, University of California Press.
- BIRK, D. B. W.
 1976 *The Malakmalak Language, Daly River (Western Arnhem Land)*. Pacific Linguistic B-45, Canberra, the Australian National University.
- BLAKE, Barry J.
 1969 *The Kalkatungu Language*. Australian Aboriginal Studies 20, Linguistic Series 8, Canberra, Australian Institute of Aboriginal Studies.
- BOAS, Franz
 1911 Kwakiutl. In Franz Boas (ed.), *Handbook of American Indian Languages*, Part I, Washington, Government Printing Office, pp. 423-557.
- BRICHOUX, Robert M. & Felicia BRICHOUX
 1977 A Sketch of Ilianen Manobo Inflection. *Studies in Philippine Linguistics* 1(1): 166-172.
- BROWN, H. A.
 1975 The Eleman Language Family. In K. J. Franklin (ed.), *the Linguistic Situation in the Gulf District and Adjacent Areas, Papua New Guinea*, Pacific Linguistics C-26, Canberra, the Australian National University, pp. 279-376.
- CAPELL, A.
 1940 The Classification of Languages in North and North-West Australia. *Oceania* 10: 404-433.
 1941-1942 Languages of Arnhem Land, North Australia. *Oceania* 12: 464-392.
 1942-1943 Languages of Arnhem Land, North Australia. *Oceania* 13: 24-50.
 1976 General Picture of Austronesian Languages, New Guinea Area. In S. A. Wurm (ed.), *New Guinea Area Languages and Language Study Vol. 2. Austronesian Languages*, Pacific Linguistics C-39, Canberra, the Australian National University, pp. 5-52.
- CAPELL, C. & H. E. HINCH
 1970 *Maung Grammar*. The Hague, Mouton.
- CONKLIN, Harold C.
 1962 Lexicographical Treatment of Folk Taxonomies. *International Journal of American Linguistics* 28(2) Part IV, pp. 119-141.
- COWAN, H. K. J.
 1953 *Voorlopige Resultaten van een Ambtelijk Taalonderzoek in Nieuw-Guinea*. 's-Gravenhage, Martinus Nijhoff.

- DIXON, R. M. W.
1977 *A Grammar of Yadjit*. Cambridge, Cambridge University Press.
- DOKE, C. M.
1967 *The Southern Bantu Languages*. London, International African Institute, Dawson's of Pall Mall.
- ERWIN, W. M.
1963 *A Short Reference Grammar of Iraqi Arabic*. Washington, Georgetown University Press.
- FORCHHEIMER, Paul
1951 *Category of Person in Language*. Unpublished Ph.D. Dissertation Paper of Columbia University, Cambridge.
- FRACHTENBERG, Leo J.
1922 Coos. In Franz Boas (ed.), *Handbook of American Indian Languages*, Part II, Washington, Government Printing Office, pp. 279-429.
- FURBY, Christine E.
1972 The Pronominal System of Garawa. *Oceanic Linguistics* 91(1): 1-31.
- GEYTENBEEK, Helen
1964 Personal Pronouns of Gidabul. In Pittman & Kerr (eds.), *Papers on the Languages of the Australian Aborigines*, Canberra, Australian Institute of Aboriginal Studies, pp. 91-100.
- GLASGOW, Kathleen
1964 Four Principal Contrasts in Bureru: Personal Pronouns. In Pittman & Kerr (eds.), *Papers on the Languages of the Australian Aborigines*, Canberra, Australian Institute of Aboriginal Studies, pp. 109-117.
- GODFREY, Marie
1964 Outline Description of the Alphabet and Grammar of Wik-Munkan, Spoken at Loen, North Queensland: A Tentative Outline Grammar (cis) of Wik-Munkan. In Oates, William et al, *Gugu-Yalanji and Wik-Munkan language Studies*, Occasional Papers in Aboriginal Studies No. 2, Canberra, Australian Institute of Aboriginal Studies, pp. 57-78.
- GODFREY, Marie A. & H. B. KERR
1964 Personal Pronouns in Wik-Munkan. In Pittman & Kerr (eds.), *Papers on the Languages of the Australian Aborigines*, Canberra, Australian Institute of Aboriginal Studies, pp. 13-34.
- HAAKSMA, Remy
1933 *Inleiding tot de Studie der Vervoegde Vormen in de Indonesische Talen*. Leiden, E. J. Brill.
- HARRELL, Richard S.
1962 *A Short Reference Grammar of Moroccan Arabic*. Washington, Georgetown University Press.
- HAYWOOD, J. A. & H. M. NAHMAD
1965 *A New Arabic Grammar of the Written Language*. London, Lund Humphries.
- HEAD, Brian F.
1978 Respect Degrees in Pronominal Reference. In Greenberg (ed.), *Universals of Human Languages* vol. 3, Stanford Univ. Press, standard, pp. 151-211.
- HEADLAND, Thomas N. & Alan HEALEY
1974 Grammatical Sketch of Casiguran Dumagat. *Pacific Linguistics* A-43, *Papers in Philippine Linguistics* 6: 1-54.
- HERSHBERGER, Ruth
1964 Personal Pronouns in Gugu-Yalanji. In Pittman & Kerr (eds.), *Papers on the Languages of the Australian Aborigines*, Canberra, Australian Institute of Aboriginal Studies, pp. 55-68.

- HOOKER, Betty
 1975 Some Nominal Phrases in Yakan. *Pacific Linguistics A-44, Papers in Philippine Linguistics 7*: 1-12.
- HUDSON, Grover
 1976 Highland East Cushitic. In Marvin Lionel Bender (ed.), *the Non-Semitic Languages of Ethiopia*, East Lansing, African Studies Center, Michigan State University, pp. 232-277.
- IRWIN, Barry
 1974 *Salt-Yui Grammar*. Pacific Linguistics B-35, Canberra, the Australian National University.
- KHALAFALLAH, Abdelghany A.
 1969 *A Descriptive Grammar of Sasi: di Egyptian Colloquial Arabic*. The Hague, Mouton.
- KIRTON, Jean F.
 1964 Anyula Person Pronouns. In Pittman & Kerr (eds.), *Papers on the Languages of the Australian Aborigines*, Canberra, Australian Institute of Aboriginal Studies, pp. 139-148.
 1971 Yanyula Noun Modifiers. *Pacific Linguistics A-27, Papers in Australian Linguistics 5*: 1-14.
- KUIPERS, Aert H.
 1974 *The Shuswap Language*. The Hague, Mouton.
- LAYCOCK, Don
 1969 Three Lamalamic Languages of North Queensland. *Pacific Linguistics A-17, Papers in Australian Linguistics 4*: 71-94.
 1974 *Materials in New Guinea Pidgin (Coastal and Lowlands)*. Pacific Linguistics D-5, Canberra, the Australian National University.
- LLOYD, Richard G.
 1975 The Angan Language Family. In K. J. Franklin (ed.), *the Linguistic Situation in the Gulf District and Adjacent Areas, Papua New Guinea*, Pacific Linguistics C-26, Canberra, the Australian National University, pp. 31-110.
- LOVE, J. R. B.
 1945-1946 The Pronoun in Worora and Pitjantjatjara. *Oceania 16*: 70-86.
- NEWMAN, Stanley
 1977 The Salish Independent Pronoun System. *International Journal of American Linguistics 43(4)*: 302-314.
- OATES, William & Lynette OATES
 1964 Gugu-Yalanji Linguistic and Anthropological Data. In William Oates *et al.*, *Gugu-Yalanji and Wik-Munkan Language Studies*, Occasional Papers in Aboriginal Studies No. 2, Australian Institute of Aboriginal Studies.
- PAWLEY, Andrew
 1969 On the Internal Relationship of Eastern Oceanic Languages. *Pacific Anthropological Records 13*: 1-142.
- PLATT, John T.
 1972 *An Outline Grammar of the Gugada Dialect: South Australia*. Australian Aboriginal Studies No. 48, Canberra, Australian Institute of Aboriginal Studies.
- PRENTICE, D. J.
 1971 *The Murut Languages of Sahah*. Pacific Linguistics C-18, Canberra, the Australian National University.
- PROKOSCH, E.
 1939 *A Comparative Germanic Grammar*. Philadelphia, Linguistic Society of America, University of Pennsylvania.

- RAY, Sidney Herbert
1919-1920 The Polynesian Languages in Melanesia. *Anthropos* 14-15: 46-96.
1926 *A Comparative Study of the Melanesian Island Languages*. Cambridge, Cambridge University Press.
- REID, Lawrence A.
1971 *Philippine Minor Languages: Word Lists and Phonologies*. Oceanic Linguistic Special Publications No. 8, Honolulu, University of Hawaii Press.
- SCHACHTER, Paul & F. T. OTANES
1972 *A Tagalog Reference Grammar*. Berkeley, University of California Press.
- SCHEBECK, B.
1973 The Adnjamathanha Personal Pronon. and the "Walipi Kinship System." *Pacific Linguistics*, A-36, *Papers in Australian Linguistics* 6: 1-45.
- SHARPE, Margaret C.
1975 Notes on the "Pidgin English" Creole of the Roper River. *Pacific Linguistics* A-39, *Papers in Australian Linguistics* 8: 1-20.
- 下宮忠雄
1979 『バスク語入門』東京, 大修館書店。
- SOMMER, B. A.
1969 *Kunjen Phonology: Synchronic and Diachronic*. Pacific Linguistics B-11, Canberra, the Australian National University.
- SOMMER, B. A. & E. G. SOMMER
1967 Kunjen Pronouns and Kinship. *Pacific Linguistics* A-10, *Papers in Australian Linguistics* 1: 53-59.
- STREHLOW, T. G. H.
1942-1943 Aranda Grammar. *Oceania* 13: 177-200.
- TOPPING, Donald M.
1973 *Chamorro Reference Grammar*. Honolulu, University Press of Hawaii.
- TRUDINGER, Ronald M.
1943 Grammar of the Pitjantjatjara Dialect, Central Australia. *Oceania* 13(3): 205-223.
- TRYON, D. T.
1970 *An Introduction to Maranungku (Northern Australia)*. Pacific Linguistics B-15, Canberra, the Australian National University.
1974 *Daly Family Languages, Australia*. Pacific Linguistics C-32, Canberra, the Australian National University.
- TUCKER, A. N. & M. A. BRYAN
1966 *Linguistic Analyses: The Non-Bantu Languages of North-Eastern Africa*. London, International African Institute, Oxford University Press.
- VAN DER TUUK, H. N.
1971 *A Grammar of Toba Batak*. The Hague, Martinus Nijhoff.
- VOORHOEVE, C. L.
1971 Miscellaneous Notes on Languages in West Irian, New Guinea. *Pacific Linguistics* A-28, *Papers in New Guinea Linguistics* 14: 47-115.
- WEAVER, Dan & Marilou WEAVER
1969 Ranking of Personal Pronouns in Agusan Manobo. *Oceanic Linguistics* 3: 161-170.
- WURM, S. A.
1969 The Linguistic Situation in the Reef and Santa Crus Islands. *Pacific Linguistics* A-21, *Papers in Linguistics of Melanesian* 2: 47-105.
1971 *New Guinea Highlands Pidgin: Course Materials*. Pacific Linguistics D-3, Canberra, the Australian National University.
1972a *Languages of Australian and Tasmania*. The Hague, Mouton.

- 1972b Notes on the Indication of Possession with Nouns in Reef and Santa Cruz Languages. Pacific Linguistics A-35, *Papers in Linguistics of Melanesian* 3: 85-113.
- 1975 The Kiwaiian Language Family. In K. J. Franklin (ed.), *the Linguistic Situation in the Gulf District and Adjacent Areas, Papua New Guinea*, Pacific Linguistics C-26, Canberra, the Australian National University, pp. 217-260.
- 1976 The Reef Islands—Santa Cruz Family. In S. A. Wurm (ed.), *New Guinea Area Languages and Language Study Vol. 2. Austronesian Languages*, Pacific Linguistics C-39, Canberra, the Australian National University, pp. 637-674.
- WURM, S. A. & L. HERCUS
- 1976 Tense-Marking in Gunu Pronouns. Pacific Linguistics A-47, *Papers in Australian Linguistics* 10: 35-55.
- 八杉佳穂
- 1980 「マヤ諸語の助詞核の比較研究」『ラテン・アメリカ研究』10: 121-173。
- 吉田集而
- 1980 「指示詞にみられる空間分割の類型とその普遍性」『国立民族学博物館研究報告』5(4): 833-950。
- 1982 「会話場面における人の概念の類型論 (I)」『国立民族学博物館研究報告』7(3): 550-584。
- 1983 「会話場面における人の概念の類型論 (II)」『国立民族学博物館研究報告』8(2): 307-423。